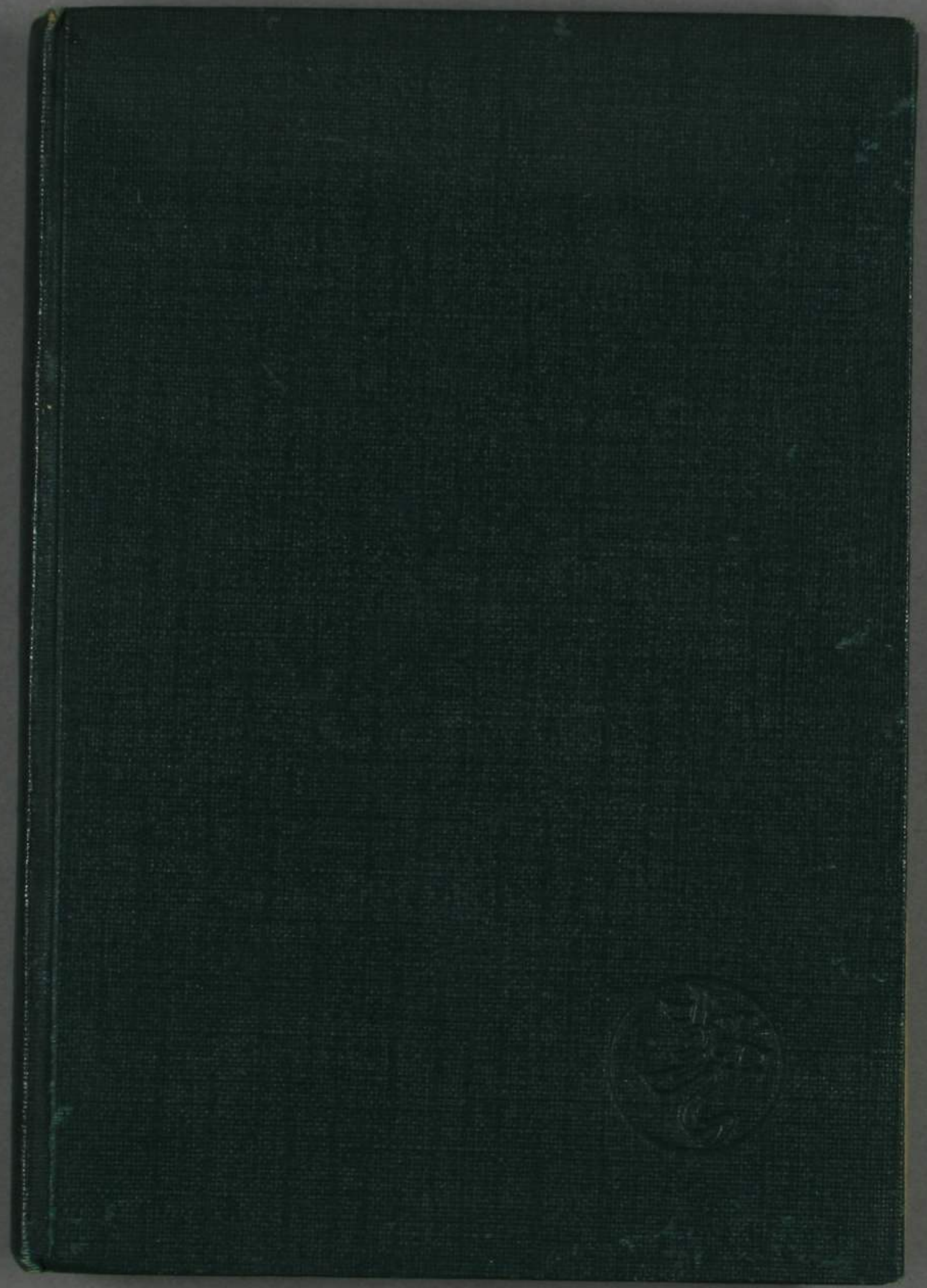


指手看孤城最白

城內迢迢著





坪内逍遙著

沓手鳥孤城落月

(著者の許諾なくして  
再行するとを許さず)



坪内逍遙著

沓手鳥孤城落月

(著者の許諾なくして  
興行するとを許さず)

## 序

此作の第一版は既に久しく絶本になつてゐたので、歌舞伎座の去る十月興行を記念かたぐ、書肆に打合せ、此改修本を刊行させることにした。

此作は、今から丁度二十年前、明治三十年の頃に脱稿したものである。多分「新小説」の誌上で発表したのは、其年の秋であつたらう。單行本として、「二葉楠」といふ小品と共に、「菊と桐」と題して春陽堂から出版したのは、同じ年の十二月のことである。

其公演は、大阪の角座が初めて、東京では東京座が初演、本郷座が二度目此度の歌舞伎座が第三回である。其中、自分が多少直接に關與したのは、

東京座と歌舞伎座とだけである。大阪のには、何の指圖もせなかつた。此外、私演としては、文藝協會の初期に於て、紅葉館で、糺庫の場だけを會員に見せたことがある。役割は、故土肥春曙氏の秀頼、東儀鐵笛氏の氏家、水口薇陽氏の淀の方などであつた。尙、岡鬼太郎、水口薇陽、久保田金僊等諸氏の一團で、名古屋の某座で、茶白山以下大詰までを半私演式に演じたことのあるのを記憶してゐるが、くはしいことは聞洩した。

東京座の時には、芝翫(歌右衛門)高麗藏(幸四郎)の二丈には、相應に念入に説明をもし注意をもしたが、其他へはほんの一應の話をした位に過ぎなかつた。舞臺稽古以前に、ともかくも本讀めいたことをして、やゝ念入に一々の役に就いて説明をもし、それから舞臺稽古、初日、二日目と三日ついでに見物をもして、其都度樂屋へ往來し、作意に叶はぬ部分々々に關し

て注意をしたのは、此度が初めて、自分としては前例の無いことであつたといつてよい。俳優達も、よく言ふことを聽いてくれたので、時間と勞力とを費したのが、流石に無駄にもならなかつた。

興行の成績は、全體を通じて此度が最上であつたが、藝の出來榮からいふと、東京座の時は、糺庫の場が第一等で、櫻門前が其次で、序幕の如きは、殆ど其存在を認められなかつたらしい。藝の出來では、芝翫の淀の方が第一、新十郎の大住與左衛門と高麗藏の井伊掃部頭が其次、猿之助(段四郎)の且元、高麗藏の秀頼が其次といふ順序だと思つた。劇通及び世間の評もはい同様であつたらしい。大阪の角座のは、自分は全く知らないが、故浩々歌客氏の評によると、我常(仁左衛門)の且元が無類であつたといふ。本郷座の時は序幕が出ず、さうして藝の出來は、押しならして、中位で、淀君



も東京座の時より落ちてゐた。此度のは、無論、淀君が第一等。少々技巧が勝ち過ぎたが、且元が第二等の出来。それから其次が、家康、秀頼、常盤木、饗庭。此四人は粗同格の出来と見てよかつた。其他は第四等の出来。しかし押しならして、此度は一體に上出来であつて、序幕から大詰まで、とにかく絶えず緊張した舞臺面を見せてゐた。

既に東京座の時に、實上演上の都合を考へて、序幕の常盤木の白其他に幾分かの修正を加へておいたが、本郷座の時に、時代の推移を思つて、更に若干の添削を施した。茶臼山の場、糺庫の場、共に序幕同様に七五、八六式に綴つてあつたのを、成るべく散文風に直しておいた。併し此度讀直して見ると、序幕との調和上、妙でない部分も生じたので、又逆戻しにした箇所もある。それこれ、此後の興行の都合を慮つて、此改修本を公刊させる

ことにしたのである。波線を附しておいた部分は、上演の際には、いつも省略した白である。

此改修本には、大道具、人物の出入、其位置、其科介、其表情等に關する點を、成るべく詳細に記入しておいた。これらは、此度の上演に際して、自分が舞臺監督の資格で指定したものであつて、大抵は最初からの作意のまゝだが、俳優達の工夫に成つた科介も幾らかまじつてゐる。例へば、淀の方の序幕幕ぎれ前の憤悶の科、糺庫の場の「わしの子の秀頼ぢやわいのう」といつてから、ふと泣き出す狂女の科などは、成駒屋の工夫で、作意をも助け、場面をも活し得たと思つたから、其儘借用しておいた。

稀には、此度の舞臺面と異つてゐるトガキもある。それは、トガキの方が作者の本意で、舞臺面の方は、むしろ俳優の仕勝手であつたのだと解釋し

て貰ひたい。

普通の讀者の便宜を思つて、成るべく、トガキ中に劇場科語を用ふることを避けた。嗚物、囃子、其他假髮、衣裳、小道具等まで、くはしく取調べてはおいたものゝ、わざと省いた。

序幕の幕あきに手負の武士を運ぶのは、已に東京座の時にしたことで、これは當時の座附作者竹柴晋吉氏が、たしか久保田米齋君の工夫を受けて試みたのであつたが、序幕の氣分を作る上に有効と認めためたので、此度も借用し、且つ此改修本中へも借用した。次に、茶臼山の場で六ツ太鼓を打つのを幕あきの木の代りに使ふ工夫は、これは大阪角座興行の際に於ける故久保田米齋君の思附であつたといふのを、此度はじめて松島屋に聞いて、これも其儘借用した。それから、二の丸内亂戦の場へ裸武者を出すのは、最

初からの作意であつたのだが、裸身の獨武者、薄田主馬といふ人物を特に點出して花々しく働せたのは、これは座附作者竹柴晋吉氏の思附である。これも、實際本筋の邪魔にならぬのみか、見た目が面白いと思つたから、同じく借用することにした。

背景、大道具等は、専ら久保田米齋君の意匠に係り、衣裳の好みも、大體は同君の指圖である。但し主なる役二三に對しては、當の優人自身が、それ／＼工夫を凝した。舞臺面の寫眞は、半は新演藝、半は演藝畫報から借用した。

大正五年十月下旬

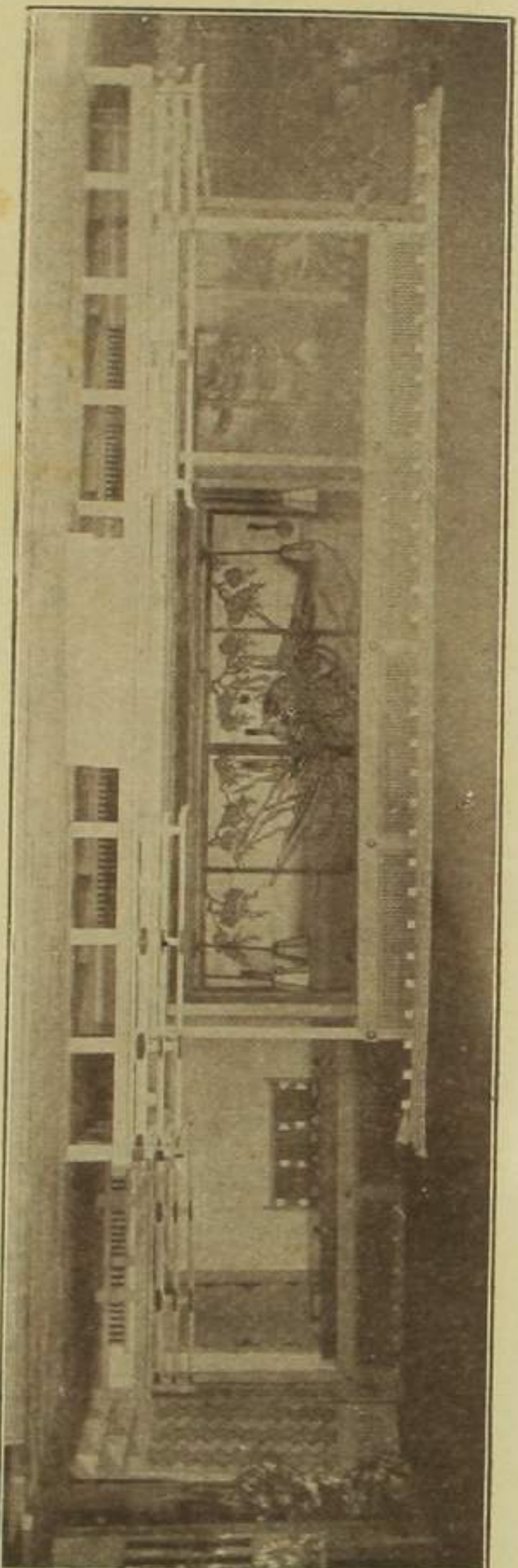
著

者

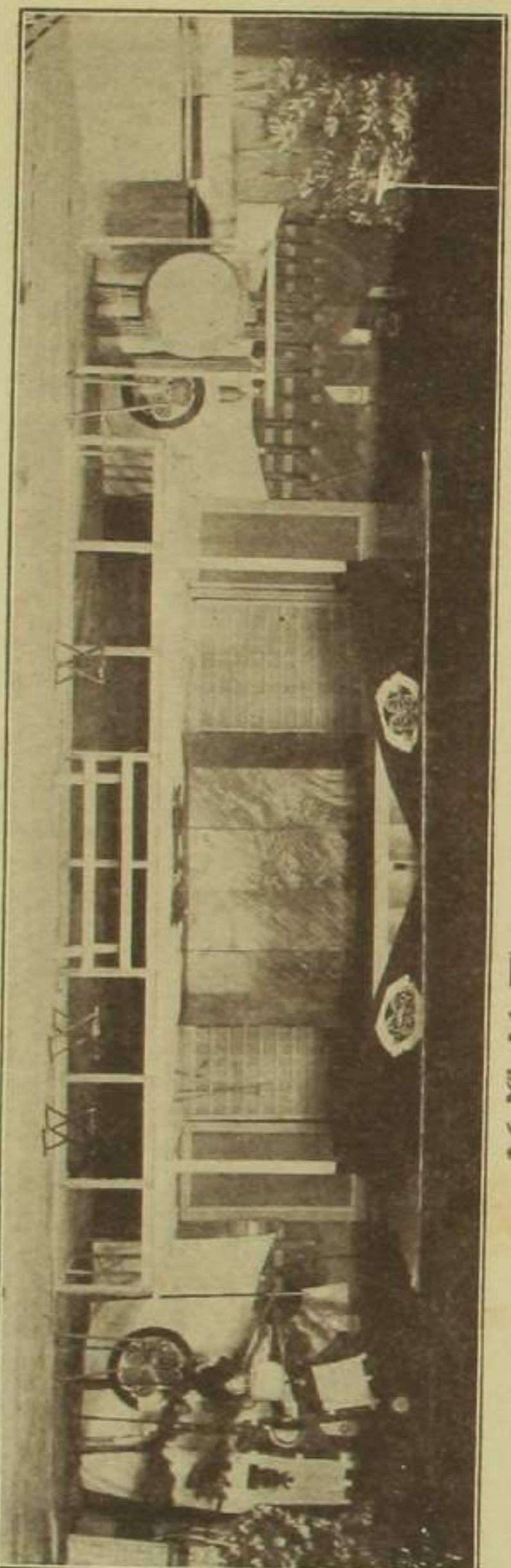
沓手鳥孤城落月興行

役	時處	
	大阪角座	東京東京座
淀君	片岡我當	中村芝翫
常盤木	片岡我當	市川門之助
千姫	中村芝雀	澤村宗之助
正榮	故中村高福	市川新十郎
小車	市川米十郎	阪東秀調
饗庭	故中村歌昇	故嵐芳三郎
梶葉	市川米十郎	阪東三田八
大藏卿	黒谷市藏	中村翫助
		吾妻市之丞
		中村歌右衛門
		なし
		市川米藏
		中村福助
		尾上梅幸
		中村芝鶴
		吾妻市之丞
		阪東秀調
		中村吉三郎
		吾妻市之丞

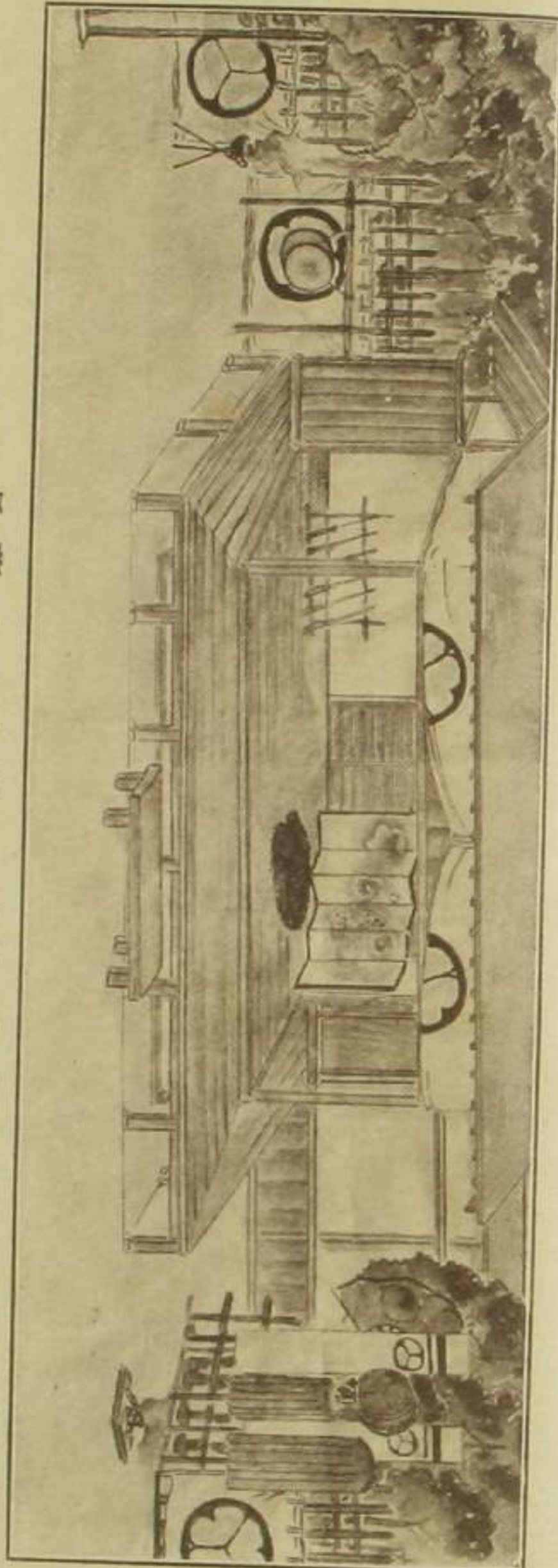
秀頼	片岡我童	市川高麗藏	市村羽左衛門	市村羽左衛門
家康	黒谷市藏	中村芝翫	中村歌右衛門	市川八百藏
本多佐渡守	故實川延三郎	澤村訥子	市川小團次	市川段四郎
井伊掃部頭	故實川延三郎	市川高麗藏	市川壽美藏	市川猿之助
高力左近	阪東長次郎	尾上榮三郎	市川米藏	市川松尾
十河十兵衛	片岡當十郎	中村翫助	市川左升	片岡我藏
片桐出雲守	尾上多見之助	澤村宗之助	中村又五郎	片岡市藏
氏家内膳	尾上多見之助	市川猿之助	市川小團次	市川段四郎
大住與左衛門	故中村高福	市川新十郎	市川荒次郎	尾上菊四郎
大野修理	故實川延三郎	澤村訥子	市村龜藏	市村龜藏
片桐且元	片岡我當	市川猿之助	市川左團次	片岡仁左衛門



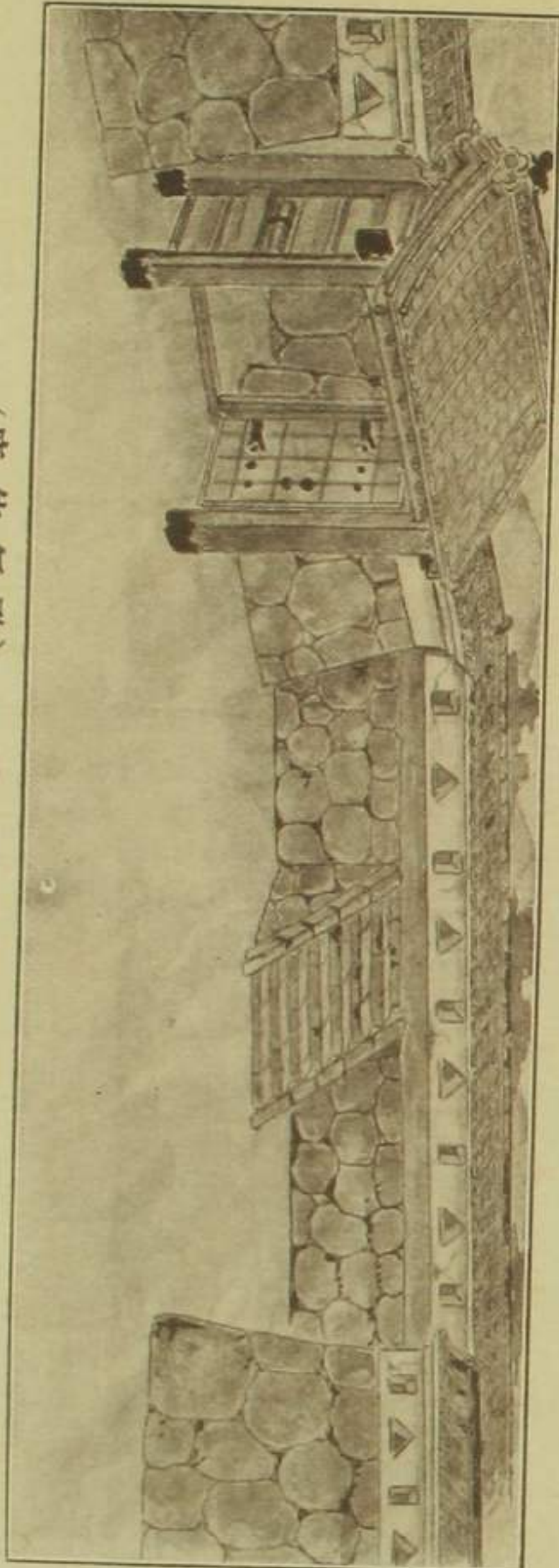
大 阪 角 座 二 於 序 幕 舞 台 面



同 上 二 幕 目 舞 台 面



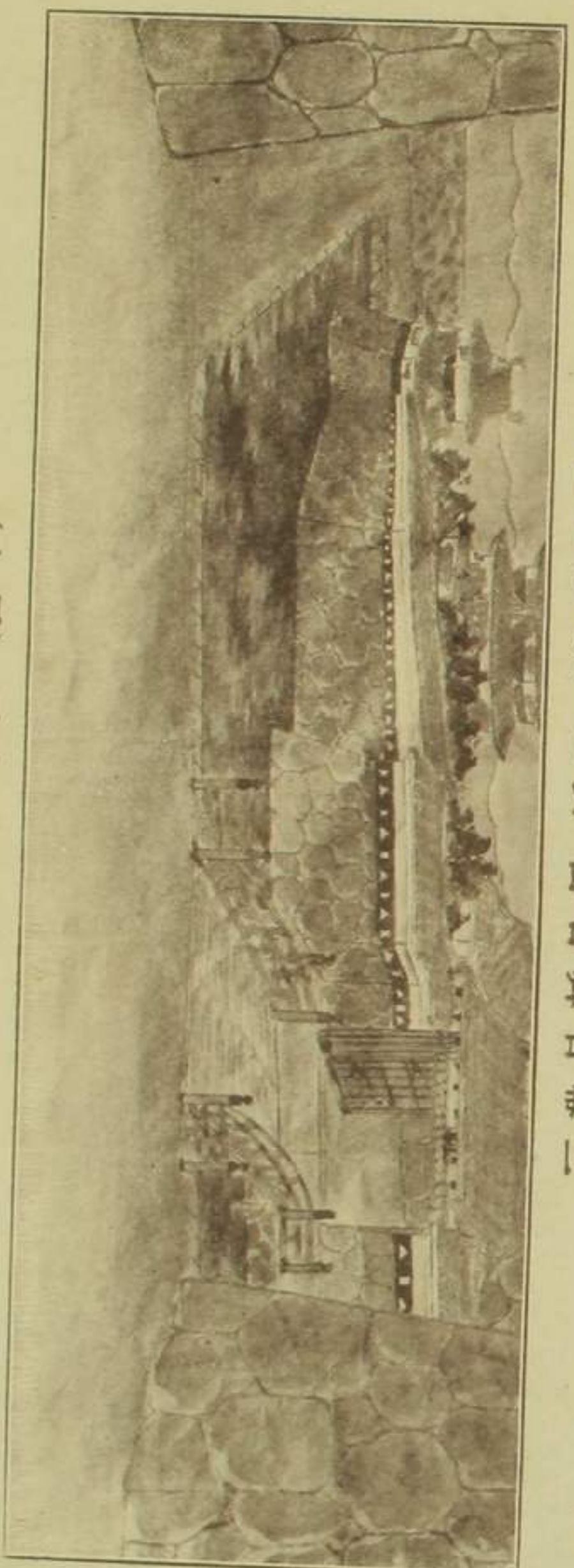
目幕ニルケ於ニ座伎舞歌



(座伎舞歌) 一其面台舞目幕三



(座伎舞歌) 二其 面台舞目幕三



(上同) 面台舞目幕四

沓手鳥孤城落月

事前の事情

寄手の凱歌遠方に消えて、燃え残る兵火五月の空をこがし、赤色の七日月血沙  
 なあびたる利鎌のごとく天守臺の西に落ちなんとす。南山不落の大坂城も餘命こ  
 よひを限りとて見えし。後藤、木村、薄田をはじめとして頼みきつたる勇將は先  
 きだつて討死し、渡邊内藏介も重傷を負ひ、夜に入つては天王寺口も悉く敗れ潰  
 え、軍師左衛門佐幸村も命を落し、残る四天王の隨一人、長曾我部盛親親子、ま

た修理亮治長の父、入道々軒、其の他二三の股肱のやからも、如何さまに思ふ所  
 ありてか、遽かに敗軍の途中より透電せり。さるほどに敗報櫛の齒をひくが如く、  
 秀頼卿も今は是れまでと思されければ、徐に千疊敷に入らせたまひて、既に御生  
 害の御覺悟ありけるを、毛利勝永、速水守久等「夜中には敵も攻め詰め候ふまじ、  
 夜明けて後に御覺悟あつてもおそかるまじ」と修理亮もるとも押しとどめまわら  
 せければ、君も一たびは思ひとどまらせたまふ。かくて守久等はそれく持口を  
 割り渡して外郭を固めさせつ、尙ほ隈なく指圖して見苦しきものどもを取りをさ  
 め焼きすてなんとする程に、未練臆病のともからは、竊かに夜に乗じて抜けいで、  
 思ひくくに落ち失す。子の時過ぐる程までは城内騒然と濫りがはしかりしが、更  
 けゆくまゝに漸う打ちしめりゆく奥殿物さびしく、女わらべ寄りこそりて泣き惑  
 ふさま哀れなり。時に元和元年五月七日の夜、豊臣家滅亡の前夜なり。

序 幕

大阪城内の奥殿

初

正面は左右へ廻して高欄附、廣縁の奥御殿、正面には階子、尙上手奥へ退つて縁側つゞき  
 の別棟、又下手奥にも別棟、築山泉水と共に遠く見え、前の方にも植込。上手々前は稍高き  
 網代垣。殿上には、燭臺が只二基、上手と下手とに不規則に置てあるのみで、人影は見え  
 ない。ト向より腹巻した武士二人宛にて大將分らしい手負の武士二人を各々楯に載せて擔  
 き荷ひつゝ出て來り、上手網代垣の後へ通り抜て入る。ト直後から婢女らしき年配の女と  
 同じく若い女とが甲斐々々しく釋がけにて、白布、蒔繪の手桶などを携へ、急ぎ足にて下手  
 より出て來り續いて上手へ入る。ト遠寺の鐘。やがて殿上の下手奥から縁側づたひに侍女  
 初簞、紅簞、錦木、花野、しほくと何れも泣きながら出て來て不規則に屏並ぶ。  
 ナア申し、紅簞どの、かうして互ひに話しあふも今宵限りでござんせ



うぞえ。かうなること、知つたなら、此の正月の宿下りに流行風ひいたを幸ひ、養生せいであのまゝに、母さんの傍にゐつらうもの、情ないことになつたわいなア。

紅 お前はまだしもお正月に、お宿下りをさしやんしたゆゑ、諦めも附けば附く、此の七月を樂しみに空待した妻の心、推量して下さんせ。

錦 そりや妾とても同じこと、宿世ぢやと斷念めて、死ぬる覺悟はしてゐれど、成らうことなら、たつた一目、母さんの顔が見て死にたうござんす。

花 それもなア、如何あつても、所詮助からぬと思ふにこそ、御臺さまにおすがり申し、お命乞ひをなさるれば、上さまはじめ我々も、さつと命は助かるげな。最前も大藏さまや皆さまが御臺さまを關東の御陣にお送り

なさるゝやう、御前にお勧めなされたれど……さては關東に内通して姫を逃す心がな、千姫は一寸も、こゝ離すことならぬ〜とお腹だち、あられもないお疑ひ。  
花 それといふのも段々と、日ましに募る御不例ゆゑ。  
紅 其の御不例の源は、淀さまのお讒言でお果なされし關白さまのお怨み。  
初 眞に怖しいもので……(ト皆々ぞつとした思入)。  
皆 ござりませすなア。  
錦 とはいへ、此方は知らぬこと、怨靈さまも聞えぬ。どうしても明日は死ぬのかいのう。

紅 初  
紅簾どの。  
初簾どの。

花 錦木どの。  
錦木どの。  
花野どの。

(下四人互ひに顔を見あはせ手を取りあひて、一齊に聲をたて、はしたなく泣き伏す。此時奥女中小車の局、雪洞を手にもち、奥より立ちいで)

小 又してもはしたない。常とはちがひ、お座所が近うござりまするぞよ。  
見苦しい。たしなみませうぞ。

皆 ハイ、御免なされて下さりませ。

小 明日のお心もうけて、幾人あつても手は足らぬ。うつかりしてゐる時  
かいの。そもじたちもお手つだひ。さ、残らず揃うて、奥へ。

(下衆せりふにて皆々を追たてる。初簾、紅簾、錦木、花野涙をふき、會釋してしほくと奥へ入る。小車獨り残り、皆々を見送り、やがて四邊へ思入ありて、階子の降口に腰かけ)

真田木村を初めとして、諸將大かたは討死なし、今宵に縮まる當家の運

命。恩顧譜代の歴々さへ、秋をまづ知る燕子の、倒れかゝりし古軒端に  
巢まで残してちりくばらく、只一代の榮耀の花、散つて残るは身一  
つの、落目も當家の自業自得。かうあらうと思ふたゆゑ、關東へ心を通  
じ、本多正信どの、内意をうけ、何卒首尾よう千姫さまを誘ひいだしま  
ゐらせんと、此の正月のはじめよりお婢女に住みこみし本多家の奥女中、  
常磐木と心を合せ、毎日に油断を窺へども、淀さまの鵜の目鷹の目、けふ  
までは空に過したれど、もはや今宵は延ばされぬ。(ト立上り)常磐木を呼  
びいだし、今の間に手筈をせうか……イヤ、それよりもまづ姫君さま  
を。幸ひ奥は取込最中……今の間に隙を見合せ……さうぢや。

(ト上手の奥へ行かうとする。此何前下手築山植込かけより、婢女お松實は本多佐渡守が家臣某の妻常磐木、あたりへこなしあつて忍びいで、此時すかし見て、つかつかと階子のほとりへ来て)

常 小車さま。

小 ヤ、常磐木どのか。

常 アモシ。

常 (ト常磐木四邊へこなし、階下の下に居る。小車は階子の降口に坐る。常磐木聲を竊めて) 小車どの、もはや今宵は外されませぬぞ。

小 今も今とて其の事。未練の歎きに上下とも眼くらむ油断ぞ幸ひ……きつと首尾してお姫さまを、此處まで程は難なけれど……番所々々の目をかすめ、廓をぬけてる手段は何と。

常 オ、其のお氣づかひは御無用々々々。妾の手にさへ受けとらば、お姫さまを婢にしたて、御本丸をぬけてる工夫は、お料理番の大住與佐、それから先は同腹中の佐々孫助が兼ねての魂膽……必ず大事ござりませ

ぬ。何はともあれ、片時も早う。

小 それ聞いて安堵しました。そんなら此の間に。

(トゆきかける。)

常 アモシ、必ず共に

小 合點ぢやわいなア。

(ト二人よろしくこなしあつて、小車は急ぎ縁側つたひに上手奥へ入る。常磐木獨り残り)

常 どのやうな明君さまも、子ゆゑの闇にはお目がかすむ。お姫さまが絆となり、いざ落城の間際となつて御成敗の手が狂はば、耕した地面に醜ぬ艸の、種を翻すも同然ゆゑ、其の禍の根を絶つため、事にささだち千姫さまを、伴ひいだしまるせよとの嚴命をうけ、夫の指圖に隨うて婢女に姿をやつし、邪推、疑ひ、依怙最負、其の同士打を附目にして、あ

のなぐるま小車にまづ取り入り、まんまと奥に住みこみしも、かぞ數ふれば早や五月、まん萬一こよひを過す時は、しんく辛苦の萱も一日の煙。どうぞ首尾ようお姫さまを、お伴ともしたいものぢやな。

(トこのうち上手別棟の妻戸を開きて、内より以前のこま小車、小脇に召換の包をいだき、秀頼公の御臺所千姫君の手を引き、わざと灯を持たず、縁つたひに闇中をさぐりくいで、やがて此方へ近づく。ト俄に足早に走りいづる。すぐ其の後より淀の方、長刀を小わきに振いこみ、同じく忍び足にてつけて出る。)

ときはず小 常磐木どの。(ト常磐木千姫に會釋しようとするを止めて)ア、コレ、お會釋は後のちに〜。めさせかへます暇はない、植込かけて此の召物……

(ト常磐木に包を渡し)

かういふうちも心がせく、人目にかゝらぬ其のうちに(ト千姫を促すと、千姫は名残をしげに見返り)

なぐるま千 そんなら小車、また逢ふぞや。必ず無事で(トいひかけるを止めて)  
な小 アモシ、何にもおつしやりまするな。常磐木どの片時も早う。  
さア常 さア、かうおこし遊ばしませ。

(ト常磐木階子を上り、千姫君の手をとらうとする。此以前、淀の方此方に近づき、縁側の小簾かけに身をひそめて問答をきいてなり、此時つゝと出で)

曲者くせものツ。

にん小 ヤ、あなたは……  
(ト三人あなやと驚きふりかへる。小車、淀の方を見て)

(トあわて、下手へ逃げようとする。淀の方長刀を揮つて見事に小車を斬り倒す。小車すぐ息たゆる。常磐木も不意に驚き、思はず二足三足階下へあとすさる。千姫は怖れて階子を駆け降りんとするを、淀の方かさす長刀の柄にてしかと抑へて)  
曲者が入つたるぞ。出あひませい〜。

(ト常磐木ハツと我れに返り、手早く懐刀をぬき、淀の方にかゝる。此の途端、奥及び下手より響庭の局、梶の葉の局、其他女中大勢、駆けいで、響庭の局はすぐに割つて入り、手早く常磐木を階下へ突落す、梶の葉、其他助けて、激しき併し瞬間の立廻りにて常磐木は懐刀を打落され、遂に梶の葉の爲に腕をれちあげられて、いましめられる。

響 驚き入つたる意外の珍事。御前さまには、何處もお怪我はござりませぬか。

(ト千姫を見て) ヤヤあなたは千姫君さま。

梶 (ト小車の死骸を見て) ヤ、こりやこれ、小車どの、……

皆々 此の體は。

(ト皆々驚く。千姫ふるへてゐる。此以前、腰元二人階下に降り、梶の葉から常磐木を受取り、下手の庭木に繋ぎ、蚤をしてゐる。淀の方は尙長刀の柄にて千姫をおさへたまふで、一同をシロリと見かへり、わざと始めは静に)

淀 ヤイ皆の者、目を開いてよう見やれ。イヤサ、よう主の命まもり、



よう用心ようじんしてたもつたのう。斯かうあらうと知しつたるゆゑ、千姫ひめどのに氣きを附つけいと、吩いひつけたを鼻はなであしらひ「何なんの大事だいじぞざりませう、御臺みだいさまは確きつと私わたくしがあづかります」と、口廣くちひろう言いうた饗庭あへばをはじめ、邪推じゅういひがみと常日つねひ頃ころ、後言かげごとを言いふ其方そちたちは、真ほんに甚きつい天眼てんがん通つう、テモ頼たのもしい(ト千姫ひめを手荒てあく上手かみせ奥おくへ突きやりて長刀ながたを抛なげいだし) 不埒ふらち者ものめが。

(トきつく言いつて、淀よどの方あた怒いか怒ぬの思入おもひいれ。眼尻まなぢりをつりあげ身をふるはせつゝ、皆々みなみなを睨にらみまはして座ざにつく。饗庭あへばの肩かたは面目つはめなげに手をつき)

饗あへば 恐れ入おそりましてござりまする。何なんと申まをしわけ仕つかまつりませうやら、恐れ入おそりましてござりますれど、餘人よじんは知しらず小車こぐるまに、かやうな野心やしんがござりませうとは、夢ゆめさら以もつて存ぞんじませず……(トいひかける)。

淀よど 黙だまりや。口くちと心こころとは裏表うらわらて、人ひとの心こころは上うへに見みゆるものでないと、そちや

今日となつてはじめて知つたか。イヤサ、そちや何歳ぢや。此大奥に奉公も、數ふればはや二十餘年、二十餘年の其のあひだ、恩をうけ、目をかけた、大恩ある主の零落に、ようもく、只おのれらの身を思ひ、あの大藏に相繼うち、忠義をかしに千姫を、おめく關東の陣所に送り、降参せい、と勸めたな。それを功におのれらの、命たすかりあはよくば、榮利を圖かる下心と、こちや夙に見ぬいてある。アア讀めた、その手筈が狂うたゆゑ、わざと油斷し隙を見せ、關東方のまはしものに、千姫どのを盗ますのぢやな。

嬰 物體ない、滅相な。何のマアそのやうな。最前申しあげましたは、恐れながら御助命の、其のおとりなしを御臺さまに、お絶り遊ばし大御所さまに……(トいひかける)。

淀 黙れ。

澁 ハ、。

淀 何ぢや、絶れ。絶れとは誰れに言ふ。ヤイ、みづからは右大臣秀頼が母ぢやぞよ。絶るとは、彼方が尊く、此方が卑く、又は此方に非分があつて、慈悲憐愍を願ふの喩語ぢや。假令のたれ死しようとも、あの義理知らずの徳川に、何て絶つて頼まうぞ。太閤が今おはさば、あの古狸にこそ吠面か、せ、乞食が物乞ふやうに、此方に絶らせて見せうものを。何て彼奴に絶らうぞい。よし絶らうとも、聴けばとて、彼奴らの言葉が頼みにならうか。現の證據が太閤の(ト涙聲になり)最期の最期の依頼さへ……反古……同然……

(トとぎれく、いひかけて淀の方唾吐きし、言葉がとぎれる。)

纏 恐れながら御前さま、そのやうに御意遊ばしまするは、御遠慮過ぎた  
 御心遣。最前も大藏卿が申せし通り、まこと徳川殿腹黒く、お家に仇を  
 ばなされしとも、虎狼さへ手向はぬ柔弱い者をば庇ふと聞く。況して  
 や御臺さまは孫姫君、御臺さまのお口づから、願はせられなば御助命の、  
 お沙汰に御違約ござりませうや。只今の珍事につけ、察せられまするは  
 彼方の御心底。恩義を見するは今此時。時おかれては詮ないこと、何と  
 ぞ御賢慮遊ばされ、今夜のうちに御臺さまをば……(トいはせも果てず)  
 淀 黙れ。大それた不埒不覺を、まづ詫びようとも致さいで……仔細らし  
 い諫言ごかし……ア、さこえた、こりや何ぢやな、そちや小車と同腹ぢ  
 やな。  
 纏 まつたく以てさやうな心は……

淀 さうでなくば何故に、姫を今夜逃さずば、彼方の心が察せらるゝ、逃  
 したいと何故言うた。イヤサ保證うた千姫を、何故油断して盗ませまし  
 たぞ。  
 纏 サ、その儀は。  
 淀 怪しい女をひきいれて、みづからに手向ひさせ、それでも不忠でない  
 と申すか。  
 纏 サ、それは。  
 淀 疑ひもなく其方は、大藏小車と心を合せ、當家危急となつたるゆゑ、  
 恩を忘れ、利に迷ひ、徳川に内通なし、千姫を無事に落し、其れを功に  
 命助かり……(トいひかける)。  
 纏 エ、お情ない其の御疑念……(ト泣く)。



淀 イ、ヤ、さうぢや。さうぢや。道軒めが遂電も其の手筈を合せう  
爲ぢや。辯疏あらば返答せい。何とぢや。如何ぢや。

(ト淀の方のただかになつてきつといふ。響庭こらへかれハラ〜と落涙し、さしうつむ  
き黙つてゐる。梶の葉の局恐る〜膝を進め)

梶 憚りながら申しあげます。餘人であれば存ぜぬこと、響庭の局に限  
りましては、よもやさやうな不忠な心は……

淀 ないとはいはさぬ、證據は目前。若しみづからが目ざとく見つけ、あ  
の曲者を成敗せずば、其方たちは何とするぞ。

梶 サ、その儀は。

淀 怪しい女をひさいれて、手向ひさせたは誰が罪ぢや。

梶 サ、それは。

淀 主の寢息を窺うて寢首を搔かうも知れぬ奴。ヤイ、響庭、道軒も大藏  
も、必定そちと同腹中であらうがの。返答せい。如何ぢや。

(ト淀の方柳眉を釣りあげ、顔色も蒼くなつて、睨みつけて詰問する。響庭の局は此間さし  
うつむき、默然と涙にくれてゐたが、此時愁然たる面をあげて)

梶 おそれ入りましてござりまする。斯かるお疑ひを蒙りまする上は、半  
時生くれば半時の、御心勞を加ふる道理。また存へても寸分の御奉公を  
盡す頼みも無し。御前を汚すは恐れ多うござりますれど、不忠不覺の申  
しわけ(トいひかけて、急に懐刀を取いだし)まッこの通り。

(トすぐに抜て自害しようとする。梶の葉驚き止める。此以前より上手の小簾かげにて様子  
を聞いてゐた正榮尼(六十七八)、縁側つたひにかけ入り、懐刀を持つ手をおさへて)

正 コレ、血迷うてか、響庭の局……マ、こゝをおはなしなされ……如何

なる折と心得らるゝぞ。命一つを棄つればとて、何事の申しわけにもな  
りませぬぞ。

正 ちやと申して、此のまゝには……

正 ハテマア、お離しなされといふに。

(ト懐刀をもぎとる。饗庭面目なげにうつむく。正榮尼は恭しく膝をすゝめて)

正 恐れながら、御前さまへ申しあげ奉ります。誠にはや、御前さまの  
御賢察に露ばかりもたがひませず、果してかやうな大珍事、圖らずも出  
來なし、何とお詫の申しあげやうもござりませぬ。とはいへ、かゝる仕  
宜に及びましたは、畢竟私共一同の不束、誰れ彼れ一兩人の懈怠不所  
存でもござりませぬば、何卒もちまして此尼に面せさせられまして、恐  
れながら饗庭が御不興、御宥免の下されまするやう(トいひかけて、後を見返

リ) 梶の葉どの、それ〱、皆も一所に……

(これにて梶の葉はじめ腰元らまで膝を進めて)

梶 何卒もちまして、饗庭の不埒を、御宥免下されまするやう……

腰元 私しども、共々に……

皆 お願ひ申あげます。

(ト此以前、淀の方は、正榮尼の言葉なげ善くは聞いてぬぬ思入にて、折々千姫の方を凄  
目をして睨みつけてをり、此口上が終ると、ふいと起つて階子近くまで歩み出で、階下に  
いましめられてゐる常磐木に目をつけ、急に正榮尼をみかへり)

正 正榮尼。

淀 ハ、。

あの者は曾ぞ見ぬ婢女、廻し者に相違ない。引きいだして糺問せい。

正 ハ、。

(ト正榮尼は不意の命に聊かうろたへた思入、やがて腰元らに指圖して、階子の間近へ常磐木をひきすすぶさせる。)

正 オ、此者は、此春このかた御奉公せし婢女。

淀 面を上げさせい。

正 ハ、。……ヤイ女、面を上げませい。

常 (しづかに)面を上げますまでもござりませぬ。關東の内意を受け、大膽にも入り込みしが、事敗れし上からは、疾うに覺悟は極めし此の身。

サアすつぱりと御成敗遊ばしませい。

淀 ヤアその覺悟顔が憎い。同類があまたあらう。言はずば苛責して白状させい。

常 (冷然とおちつきて)その苛責は詮ないこと。同類は天にも地にも小車どの

只ひとり。お姫さまに此の事をば、知らせましたも今がはじめて。

淀 イヤ僞りは其奴の目色に見えてある。白状するまで折檻しや。

(ト此うち常磐木思入あつて)

常 テモマア、最前からのしだらといひ、聞きしにまさる猜疑、まはり氣。

それが募つてか殘忍非道。豊臣家の滅ぶるも、眞にマア無理は無い。

淀 何ぢや。殘忍ぢや、非道ぢや。(怒に身をふるはせながら)今一度言うて見い。

常 エ、言はいでかいのう。(トきつとなり、淀の方をつくぐ見上げ)マ、見れば見る程美しい、其貌持には似も附かぬ怖しい内心如夜叉。關白どのを始めとして、御臺、若君三十餘人、殺いてのけたも皆其口。豊臣家の亡ぶるも、所詮はおことの心から。傳へ聞く唐土の褒似姫妃に劣らぬ妖婦。

毒婦とはおことのこちや。

(ト手強く言ふ。淀の方赫となつて)

淀

黙れ。其頤……同類あるに相違ない……正榮、此懐刀で切つてく、  
白状するまでさいなみませい。

(ト懐刀を正榮に渡さうとする。正榮立ちかゝれる。)

エ、何をうちく。ム、そちや此女を庇ふのぢやな。

正

イエ、さやうではござりませねど、あまり酷いかと存じまするゆゑ。

淀

酷い。……すりや、そちも小車と同腹ぢやな。

正

めつさうな、全くもちまして……

淀

さうでなくば……エ、さりくくと拷問しや。

正

ハ、ア。

腰元共 ヤ、曲者には。

(ト此うち常磐木決心の思入、此時みづから階段に頭を打附けて舌を噛み切り、繩つきのま  
まにて苦む。)

淀

ヤ、大切な手が、りを。なぜ殺した、生害させた。エ、大切な手が、

りを。(ト身もだえして残念がり) おのれ、わざと油断して自害させたに相違

ない。たとへ手が、りは失ふとも、此悪計の一味同類、さがしいださい

でおかうか。

(ト忿怒の體。此以前常磐木と淀の方との問答の間に、腰元等棍の葉の指圖にて小車の死骸  
を片附くることあり。それが濟むと棍の葉は泣伏してゐる上手の千姫の傍へ行きて、何か  
囁き慰めてなり、常磐木が自殺の騒ぎを幸ひ、千姫を促しつゝ、奥の方へ竊に退出しよう  
とする。淀の方と上手を見て、千姫の居らぬに心附き)

千 姫はどこへ……姫……（忽ち見つけて）オ、千姫どの。

（梶の葉はつと驚きて下手へ退る。淀の方つと寄つて千姫の袂をとらへ）

コレ、どこへ……イヤ、逃げうとて逃がさぬわいの。マ、こへござれ。……ハテこゝへ、ござれといふに。（ト坐につき、千姫を引寄せる。）

千 ハアイ。

（ト千姫は顔をあげかれ、只うつむいて戦慄へてゐる。皆々顔を見合せ、支へかれてゐる。）

淀 コレ、千姫どの。いかに義理知らずの家康が孫女ぢやとて、夫秀頼の命、旦夕に迫つたる今日こよひ、無仁にも、無情にも、何ぼ命が惜しいとて、能うまアのめく振棄て、落ちようとなされたの。兎の毛ほども義理といふこと、操の辨へあるならば、夙にも關東のお祖父どのに命がけの意見もあるべき筈を、恥知らず、義理知らず、人情知らずの人狼、

人くま鷹の孫なりやこそ、ようくも人質となつて油断させ……豊臣の家を亡しましたな。コレ豊臣の家を滅したは、おぬしぢや。そもぢぢや……。

（ト衛なげに俯いてゐる千姫を、こづきまはして怒り怨み、ト聲をあげて狂人の如く嘯する。正榮尼見かねてとりさへ）

正 ア、申し、其お怨みもお道理ではござりますれど、お察し申し上げまするに、不慮のこよひの大珍事は、全く小車らの思ひたち、申すまでもござりませぬが、御臺さまには露いさゝか、御存じない事でござりませう。……申し、御臺さま、ナアさやうでござりませうがな。

千 アイ、そもじのいやる通り、みづからは何にも知らず、小車が卒然と来て、兎も角もそつとこゝへ、と言つたるゆゑ……

淀 エ、だますまい、僞るまい。エ、見れば見るほど憎てらしい、其のぼいやりした貌持は（トじつと見つめて）オ、古狸の面を其のまゝ。  
（千姫、こらへかれて泣伏す）。

エ、うつむくまい、此方向きやいの。（ト無理に引向けて）最期のきはの枕邊にて……コレ、何と言うた。何と言ひをつた。『某し斯くてあらん限りは、秀頼どの、後見なし、豊臣のお家は萬歳、御安心遊ばされい。』（ト悲しげにじつと正面を見つめ、俄に泣聲になり）『コレ淀、徳川が斯うく言うた、安心せい、氣を揉むな。……氣を揉むな……安心せい』（トすくりに泣をしながら）太閤どの、最期の聲音が、まだありくと残つてある。（ト又泣き、やがて急に腹立聲になつて）其誓言を、ようもく、女わらべと侮つて、羽ふりよさま、反古となし、猫撫聲で利を食ませ、此方の飼犬をば、よ

うもく手なづけたな、手なづけをつたな。聚樂で逢うた彼折の、あの空笑貌で手なづけたか。そゝその空涙で、英雄の……太閤まで騙しをつたか。エ、面にくや、腹だゝしや。

（ト淀の方半狂亂のやうになつて、千姫の襟上をつかみ、横さまに引きたふし、懐刀を鞘のままに擲んで打擲しようとする。皆々驚く。正榮尼、鑿庭、梶の葉、左右より取締り押しとどめて）

正 マ、御無體な。こりや何と遊ばしませ。

鑿 マアくおまち……

三人 遊ばしませ。

淀 エ、そちたちが知ることか。ひかへてゐい。……  
（ト正榮、鑿庭、幸うじて千姫を引きわける。鑿庭、千姫の手を引きて奥の方へゆかうとする）。

淀 ヤ、落さうてな。

(ト梶の葉を突きのけ、追ひかけようとする。正榮尼あわて、淀の方をだきとめ)

正 コレ、響庭、御臺さまはやつぱり其處に(ト目で知らせ)そこを立つては、わるい。

淀 逃がさうなら、逃がして見よ。

(ト懷刀をぬかうとする。正榮尼其手をとめる。千姫は上手に泣き伏してゐる。響庭、梶の葉介抱する。此の途端、大野修理亮治長、鎧すがたにて下手より出て來り、此體を見て驚き、階下にて、淀の方に向ひ)

修 こは何と遊ばされましたぞ。物體なし。恐れながら、一大事の折からにござりまするぞ。お心おしづめ遊ばされよ。

正 オ、よいところへ修理亮どの。只今圖らぬ珍事出来、御前さまの激し

きお怒り。

修 ナニ、珍事出来とや。何事かは存じませねど、もはや時刻も寅の一點、東軍寄するも程あるまじ、火急のお覺悟肝要なり。尙お天守にて何かと御評議。何はしかれ、疾く御用意。

(ト此時はるかに寄手の陣にて、八ツ太鼓を打込む音、鑿々と聞え、つゞいて一番貝を吹く。これにて皆々きつとなる。)

修 オ、あれこそは關東勢の、はや押寄する合圖の陣貝、陣太鼓。此上は片時も御猶豫遊ばしがたし。御臺所をはじめまゐらせ、正榮尼にも局がたにも、いざとく御用意。

(トこれにて淀の方、つくと立ち、つかくと階子の降口まで出て向うを見こみ)

淀 スリヤ、豊臣の運命も、けふ一日となつたるかや。エ、無念やくちを

しや。(ト齒をくひしはり急に身もたえして) 無念ぢや〜。無念ぢやわいのう。

(ト階上にはたとひさまづき、取亂して泣く)。

修 其御無念はお道理ながら、計略はいまだ盡さしにあらす。兎も角もお天守臺へ……ソレ。方々、御案内々々々。

(トよろしく人々へこなし。正榮等座を起つ。響庭は千姫の手をとりて行かうとする。淀の方それを見ると、血相を變へ、卒然よつて千姫の袂をとる。千姫驚き)

千 アレー。

(ト叫ぶを、正榮おさへて)

正 アモシ、まづ入らせませう。

(トこれにて淀の方は千姫の袂をとりたるまゝ、皆々に案内せられてはいる。正榮尼残り、修理亮と貌見合せ、よろしく思入あり)。

修 正榮尼どの。シテ珍事とは如何なる儀でござりましたな。

正 サア、仔細はいまだ分明ならねど、局小車、かねても二心を抱きしにや、あれなる怪しき婢女と手筈を合せ、油断のうちに御臺様をば、竊かに落しまゐらせんと、伴ひいでしを御方さまが、御目ざとくも御成敗。それがもとにて一段と、御まはり氣やら、お猜疑やら……方々の御苦心も、かくては彌々水の泡、……情ないこととござりまする。

修 すりやそれゆゑのお腹立とな。只今も只今とて、我君にお降参の儀をくれぐれもお勧め申したれど、君にはお覺悟堅固にして、いつかな御承引のみけしき無し。此上は御母公の命をいただき、押返して御臺所を橋渡に、降参勧め奉らんと、存せしことも交啄鳥の嘴。父道軒の逐電より、飽くまで御疑念盛んにして、我々親子の心をすら、危ませらるゝと母の話。



正

かて、加へて只今の珍事に、御疑念ますく昂奮り、徳川どのに内通して、御臺さまを落すにやと、只お一圖にひがませたまへば……

修

此儀の成否もおぼつかなし。

正

修理亮どの。

修

正榮尼どの。

正

是非もなき儀で……

二人

ござりまするなア。

(ト兩人よろしく思入、なし。遠くにて貝鉦の音。)

幕

事前の事情

前將軍家徳川家康公(大御所)七日の夜に入つて御陣を進められ、眞田が陣屋跡なる茶臼山に御本陣を据ゑさせらる。御旗下には、東軍の張子房、本多佐渡守正信、徳川氏萬歳の計略を帷幄のうちに運らし、今日の一戦によつて長永に天下の禍根を絶たんとす。大旗、小旗、勝軍に倣つて、朝の風に跳躍し、山樹も雷同して鳴りどよめく。時に五月八日、東雲漸く分かれんとして鷓鴣曉を報る時なり。豊臣家の舊執事、片桐東市ノ正且元は、これより先き、去年御和睦成りし砌突然多く吐血せしが、それより俄かに重病に罹り、枕をあぐることも能はず、病軀を京師に養つて門外に出づることも無かりければ、こたびの御陣には弟主膳ノ正を名代として従軍させ、みづからは京表にとゞまり、徒らに日を過すと見えけるものから、豫て去年和信の砌、陰かに君家豊臣氏の爲に、さまざまに心を推き大御所に悃請し奉る所あり、大御所も其の苦忠を惘然におぼされ、悃請の件大

かたは承引あり、去年和信の議整ひしも、陰かに東西の間に立ちて斡旋せし市ノ  
 正が力に負ふ所多かりしが、之れを知るものは稀なりけり。さて此度の役起るに  
 及びて、憫むべし、市ノ正が經營苦心も殆ど牛は水泡に歸せんとせしを、大御所  
 流石に前約を重んぜさせられ、落城旦夕に逼るに及びて井伊、本多等、二三の腹  
 心を傍に召かせ『豫て市ノ正に約せし言葉あり、彼れが心中も不便なり、彌くと  
 ならば使節を遣はし、秀頼母子を助命し、且つかく計らばゞやと思ふ。將軍  
 に告げば事やかまし、事果て後に申すべし、汝等もしか心得よ』とひそかに内  
 命ありけるを、告げたまつる者ありて、岡山の陣におはしける將軍秀忠公きこ  
 しめし『こは惶けれど御仁恕に過ぎて大義いさゝか足らざる所あるか。恐らくは  
 孫千姫をば御不便がらせての御沙汰ならんが、斯くてはなかく天下再亂の種  
 子を貽すにひとし。我れとても阿姫不便と思はざるにあられど、千歳の大計には  
 かへびたし。眞忠を存じて天下を憂ふる者はよく其の心せよ』と仰せられし由。

二幕目

其一 茶臼山東軍本營

(正面は假陣營の俄建物、上手、下手、橋頭とも葵の紋附きたる幕を張り、左右へ廣縁を折  
 廻し、中央はすべて板張、正面に四枚のまぬら戸、庭上上手には旗、さしもの、馬印、下  
 手には大いなる陣太鼓、其他早朝なれば燃え残りたる篝火などもあり。太鼓奉行が鑿々と  
 打鳴らす六ツ太鼓の響の切るゝと同時に、旗本の士、△○○(年齢に老壯の別あり)鎧姿  
 にて出で來り、よろしく上下の床几に腰をかける)。

△ さてお互ひに恐悦千萬な儀でござる。鬼神とまで評判された眞田幸村  
 が討死いたした上は、たとひ死に物狂ひに悪戦なすとも、高の知れた殘  
 兵ども、多分日の中に没落いたして、萬民太平を謳ふてござらう。

□ されば、かやうに速かに落着いたすも、畢竟は聲なうして人を呼ぶ御仁徳の致す所てござる。太閤が恩顧の諸大名さへも、當家の御仁風には靡き従ひまする。南山不落など、申しても、其君に徳がなければ、砂利て築いた城も同然、もろいものでござるてや。

△ 大忠臣の噂ありし彼の片桐市ノ正さへも、舊臘の御陣には手勢を以てお身方いたし、剩へ、淀どの、御座所へ向け、二度までも石火矢を打ちかけたとやら承る。之れを以ても豊臣家の薄徳は思ひやられまする。

○ お味方とは申せ、彼奴の如きは不忠不義のしれもの、武士たるもの、かりそめにも同席ゆるしがたき奴てござる。

□ イヤその片桐市ノ正が、昨今しきつて大御所さまに、秀頼どの御母子の爲、お命乞致すとやら申しまする。

○ ては先だつて彼れが弟主膳正が、當御陣所へまゐつたのも、其儀の願てござるな。

△ さもあるべき儀てござる。が、今更と相成つてお助命を願ふなど、は、さて、市ノ正は、不覺仁てござるのう。

□ あのやうな狼狽者を柱石と頼んだ大阪城、此度の瓦解は理の當然と申すものぢや。

△ それといふのも畢竟は、秀頼どのが暗弱ゆゑ。

□ 一時は天下をおのゝかいた太閤が偉業も夢の間。

○ 淺ましいものでござるのう。

△□□ さやうてござる。

(ト奥にて三番員の音きこえる。)

△ オ、もはや御出陣の御用意と相見ゆる。  
 ○ しからは我々も彼方へまゐつて支度を致しませう。  
 □ さ、おこしなされ。

(ト三人は下手へはいる。やがて奥より本多佐渡守正信、七十以上、鎧腹巻、陣羽織、ついで井伊掃部頭直孝、四十歳位、同じく鎧腹巻、陣羽織を着し、兜を手にもち、直に出陣の身仕度にて立ちいで、二人あたりへこなしあつて座に着く。)

掃 (潤達に) さて、佐渡守どの、密議とは何事でござるな。

佐 (洗著に) 餘の儀ではござらぬ。豫て大御所より御内意あつた例の御助命の一條でござるが、先夜もお談し申した通り、此儀については、『何事も一天下の爲を存せよ、情誼細節にかゝづらひ、禍根を後世に貽すなよ』とおほせあつた従一位さまの御遠慮こそ、眞に一天下の重きを以て任せ

させられたる御英断と存ずるゆゑ、たとへ後日大御所より如何なるお答めを蒙りませうとも、謹んで奉じまする筈でござるが、こゝに一つの難儀は、彼の市ノ正へ秀頼どの御助命の御内約は、既にうすく外様諸侯の耳にも入りたることでござれば、今となつて御破約遊ばさるれば、弱きを憫むは人情、定業にて逝るをも醫師の匙加減に脱落があれば、愚痴愛着は之れを奇貨に、非命よ、非業よと言ひ做す例。一旦下されたる恩命の遂げられざるは、民の心を危ぶましめて、其弊、苛刑嚴罰を施すにも勝ることあり。萬一にも之が爲に、當家の御明徳に累を醸してはと杞憂の餘り、態と御諫言は申しあげず、豊島、加賀瓜の兩人に、只今大御所の上意を傳へ、程なく秀頼どの御母子御助命の上使として、城内へまかり向ふべき筈でござるが、さて、それをそのまゝに打棄おけば、根

を殘して惡木の幹を仆し、蛛網を憎みて之れを火にしながら、蛛を憐みて放つも同然。さて、何とかして一舉兩得……

(トいひつける。直孝、こらへかれたる思入にて)

掃 して御助命の上のお待遇は。

佐 されば、一萬石をまるらすべければ、速かに高野山へお登りあれとの御上意。

掃 いや、高野はさておき、たとへ出家させ、鬼界ヶ島へ流し申すとも、虎を千里に放つの例。必ず後日の禍ひてござるぞ。(一寸膝を進め、小聲になりて) 自分存ずるには、かゝる事は一刀兩斷の御處分の外はあるべからず。我々共のうち、一人切腹と肚を据ゑ、彌くの際に臨み、一舉に決すれば事すむこと。さて誰れ彼れと人を擇ぶには及び申さぬ。此儀は自

分引受申さん。御懸念は御無用でござる。

(トきつといふ。佐渡守しづかに大きくうなづきて)

佐 イヤ、さやう承つて安堵いたしました。自分の所存も貴意の通り……が、同じくば御仁徳を、あまねく内外に知らせて後……(トいひつける)。

掃 その儀も必ず御懸念なされな。これよりすぐさま出陣なし、右府いづこに御座あるとも、それがし御座所の前後を占領り、好き時分を見はからひ、首尾よく本意を遂げ申さん。

(ト決心の思入)。

佐 其御返答を承つて、佐渡悉く降心いたしました。

(トこれにて掃部頭身づくろひして)

掃 さやうござれば佐渡守どの。

佐 掃部頭どの。  
掃 御免下され。

(ト掃部頭は會釋して階段を降り、向うへはいる。佐渡守只ひとり残り、其後影を見送り、よろしく思入ありて)

佐 これほどの取計ひも、掃部ならては得う爲ぬことぢや。(トやがて正面を見て) 併ながら、有りがたさは當將軍家の御大量ぢや。よくも卑見を容れさせられて、御愛着の御絆を断たせられましたぞ。『千姫は殺いてもかまはぬ。國家の禍ひの根を枯らせよ』とは、よくぞおほせられた。其の御明德に對しても、千姫君を恙なう、救ひいだしまわらせては、此正信の面が立たぬ。(トいつたが、小首を傾けて) それにつけても、常磐木をはじめ、大住、佐々等は如何いたいたか。今以て何等の音信もなきは、心

もとないことぢやわい。

(ト心配の思入。此時青侍一人奥よりいで)

侍 御出座にござりまする。

佐 ナニ、御出座とな。

(ト直に正面のまゐら戸を左右に開かせ、大御所、隠と鐘は着せず、襦袢の袴に茶色の羽織といふ扮装にて、奥よりいで、設の毛皮に宜く住ふ。佐渡守席を下り、敬禮する。高力左近忠房其の外幕下の諸士大勢ついて出で、大御所の後又は左右によりしく居ながれる。

大 佐渡、只今片桐市ノ正が早駕籠にてまゐつたと申すことぢや。

佐 久々所勞にて京表に引籠り罷り在ると承りをりましたが、さては

自身病をおかして、推參仕つてござりまするか。

大 オ、サ、重病の上に、夜通し早駕籠でまゐつたといふから、嘸疲勞い

たしをるであらう。苦しいない、乗物のまゝこれへ通せ。

佐 ハ、かしまりました。

(ト侍士を見かへり)

おゆるしてござれば、乗物のまゝ市ノ正をお庭先へ。

侍 ハ、ッ。

(ト侍士下手へはいる。)

大 佐渡、豊島、加賀爪はもうまるつたか。

佐 只今支度中にござりまする。

大 これへ呼べ。

佐 ハ、。

(ト佐渡守また侍士に向ひ)

豊島刑部、加賀爪甚十郎の兩士を。

侍 ハ、ッ。

(ト侍士上手へはいる。やがて上手より、豊島刑部、加賀爪甚十郎、肩衣袴、上使の身仕度をなして立ちいで、上手階下よき所に平伏し)

加 加賀爪甚十郎。

豊 豊島刑部。

(ト大御所見かへりて)

大 よし〜。控へてをれ。

豊加 ハ、。

(ト此時下手幕かげより、市ノ正が男出雲守孝利(二十五六)先に、家臣十河十兵衛(五十位)付きそひ、市ノ正且元(六十以上)の乗物をかきいれ、御前なるを見て乗物をおろし、一同敬禮する。)

大 苦しうない、其のまゝ縁先へかきあげさせい。  
佐 おゆるしてござる。其のまゝ縁先へかきあげめされ。

(ト此時乗物の戸を内より開き)

市 アイヤ其儀は…：餘りと申せば憚り多い。件々。

(ト市ノ正肩衣、袴、薄き頭髮も殆ど悉く白くなる長髪、重病の體、刀を杖に辛うじて乗物より立ちいでんとして起ちかれるこなし。大御所これを見て)

大 ハテ、要らぬ辭義ぢや。それ。

(トおとがひにて指揮する。侍士階下に入りて手傳ひ、乗物のまゝ縁先へかきあげる。市ノ正扶けられて駕籠をいで、廣縁に平伏する。孝利も其の後にしたがふ。十河十兵衛はあらためて敬禮し、空駕籠に従いて下手へはいる。)

大 近う〜。  
市 ハ。

大 予もだいぶ耳が遠うなつた。もちつと近う。

市 ハ。

(ト市ノ正孝利に扶けられて、すつと大御所の傍近く座をすゝめる。)

大 市ノ正、さて久しぶりてござるの。どうぢや、所勞はちつとは快いか。

市 ハ、有りがたき御懇のお言葉…：まづ以て御前には御かはらせもな  
く、麗しきみけしき…：祝着至極にぞんじたてまつります。

大 オ、予も満足ぢや。(トつくく見て) ハテ、おやつれやつたのう。鬢髪  
も悉く白う見ゆるわい。さもあらう、さもあらう。足下の心中、家康よ  
う察しをるぞよ。

市 忝き御上意、ありがたく存じ奉ります。…：憚りながら御懇の  
お言葉に絶り奉り、相迫つたる儀にござりますれば、取りあへず願ひ



あげたてまつりまするは……(トいひかける)。

大 オ、秀頼どの母子の儀か。その儀はよう心得をるわい。只今これなる兩人を助命の使節に遣はすところぢや。

市 アイヤ、恐れながら、秀頼公御母子御助命の儀は、豫ての御誓約にござりますれば、其儀は降心いたしをりまする。今日御陣所に推参仕りましたは、其の儀ゆゑではござりませぬ。

大 何とおいやる。

市 恐れながら、只一應のお使者を以て御助命おほせいだされますは、只御助命の名のみござつて、其の實は効なき儀かとぞんじまする。

大 とはまた何故にな。

市 憚多き申條にはござりますれど、君家秀頼卿は故太閤殿下の御正嫡

にござりまするゆゑ、まつた御生得も至つて御高邁にあらせられますれば、いかほど進退谷らせられ、兵刃御頭に臨みませうとも、面を敵軍の嘲りに曝し、おめく面縛の降人の如く、よも歩行はだしにては御出城も叶ふまじく存じまする。御上使遣はされますならば、何卒相當の御禮儀を以て御迎へのほど願はしく存じ奉りまする。まつた右御親子御迎ひの役目は、何卒此且元に仰せつけられ下されたく、此儀御願の爲、推参仕つてござりまする。

(ト決心の思入にていふ。大御所聞終りて、しばし黙してゐる。諸士皆面を見合はせる。中にも高力忠房は、本多正信の方を見やり、又大御所のけしきを窺ひ、此時こらへかれて市ノ正に向ひ)

高 アイヤ市ノ正、老體病中とは申しながら、餘りと申せば慮外千萬なお

願ひてござるぞ。御助命のみゆるしあるさへ、既に格外の御仁徳なれば、只かたじけなく存じ奉り、深く感佩の致さるべき筈なるに、甘きに飽いて酸きを欲し、暖きを得て柔きを思ふ自儘のお願ひ。剩へ御前に於て憚りなくも、秀頼どの、徳をならべ、征夷大將軍たる御當家の御軍勢をば敵軍などゝは、以ての外なる過言失禮。緩怠てござるぞ。おひかへめされ。

(トきつといふ。市ノ正しづかに向き直りて、言葉静かに)

市 此は心得ませぬお言葉。大御所の御高德は、もとよりかたじけなく、深く感佩いたしをりますれど、秀頼公御母子御助命の儀は、且元、お慈悲とは心得ませぬ。まつた相當の御禮儀を盡され、御迎へ遊ばされぬに於ては、御義理十全とも心得ませぬ。先般仰せいだされましたには、秀

頼公は御舊誼深き故太閤殿下の御正嫡、兼ねては當將軍家の御婿君、大御所にも深くいつくしみおぼしめす。東西干戈をまじへさせらるゝは、一へに政道の止むを得ざるに因るとの台命。大御所はじめ將軍家に於て、義を重んぜさせられます以上は、秀頼公御母子御助命は勿論のことたるべく、まつた豊臣の社稷の儀は……

(トいひかける。高力けしきばみて膝を進めんとする。大御所は平然たる體にて、手輕に)

大 無論々々、其の通りぢや。秀頼母子迎ひの儀は、如何やうに致すも苦しうない。其役目は市ノ正に申しつくるぞ。刑部、甚十郎兩人と共に、急ぎ城内に向うてよからう。

市 ハ、。

高 すりやアノ市ノ正に、御迎への役目を……

大 いかにも。

(市ノ正改めて大御所に向ひ)

市 つきましては御親子の御輿、その他一通り、用意いたさせたくぞんじまするが……

大 ハテ、よきにはからうたがよい。

市 ハ、ッ。有りがたくぞんじたてまつりまする。

(ト市ノ正おぼえず孝利と顔見あはせ、心中に深く悦ぶ思入)

市 伴、かういふうちも心がせく。急ぎ十兵衛に用意の通り。

(ト半思入にていひ含め、やがて又大御所に向ひて)

市 恐れながら、心せきにござりますれば、これよりすぐさま退出の儀御免下されませう。

大 オ、遠慮に及ばぬ。早うおゆきやれ。

市 ハ、ッ。

(ト市ノ正急ぎ起たんとしてよろめき、はたと倒れ、病苦に惱む。孝利介抱する。大御所此體を見て)

大 乗物々々。

(トこれにて侍士畏りて、急ぎ下手へはいる。次の問答の間に、孝利市ノ正の腹帯を締改させなどすることあり。其以前、加賀爪、豊島此時、恭しく膝を進め、大御所に敬禮して)

加 さやうござりますれば……

豊 私共……

二人 兩人は。

大 オ、市ノ正を介抱いたいて、随分途中怪我のないやう。

二人 心得ましてござりまする。

(ト再び敬禮して下手へ通り抜けんとする。)

佐 アイヤ御兩所。

(ト呼び止める。二人下手に控へる。佐渡守少しく膝を進めて)

事すでに危急に相逼つてござるからは、寸分の時後れにて、自他共に何かと思ひ誤り、如何なる間違が出来たすまいものでもござらぬ。萬一の御事あらば、折角の御仁恵も畫餅となつて、後悔先に立ち申さぬ。それゆゑ、御兩所には早馬にて、市ノ正よりも先に入城なされて、委細の儀を掃部頭どのへ、必ずお間違ないやうにと。……市ノ正の介抱警護は、自分うけたまはり、後より直さま追ひつゝ申す。

(トわざとさらりと云ひ聞かせながら、暗に二人に、先へ廻つて秀頼母子を、掃部頭と打

大 げにそれも有理ぢや。しからは汝等は一足先へ。

二人 ハ、。

(ト豊島、加賀爪は會釋して急ぎ向うへはいる。このうち十河十兵衛附いて、以前の駕籠を下手よりかゝげいで、遙か下手に控へる。大御所之を見て)

大 輿を近う。遠慮には及ばぬ。それ〜。

(ト聲を掛ける。佐渡其意を傳へる。十兵衛は孝利のけしきを窺ひ、やがて以前の如く縁近く駕籠をかきあげる。孝利は此時まで瞑目しぬたる市ノ正を擁抱きて、何事かさやく。市ノ正突と目を見開き、容を改めて大御所の方に向ひ)

市 慮外御免下されませう。

大 吉左右を相俵ちをるぞよ。

市 大 市

ハ、ハ、  
おゆきやれ。

(ト急ぎ起ちて縁端へ出るとて又よろめく。十兵衛は前より、孝利は後よりだきとめる。大御所之れを見て「ア、不便だ」といふ思入。)

幕

事前の事情

大阪城の運命けふを限りの血戦恰も閑なりし時に當りて、豫てより關東に内通しぬたりし庖丁頭大住與左衛門といふ者、佐々孫助といふ者と共謀し、大臺所に白木の膳臺を積みかされて火を放ちけるに、折ふし暴風吹きいでれば炎たちまち八方にひろがり、さしも名城の大夏高樓見る／＼灰燼と延焼し、天守臺さへもほと／＼危く見えにければ、之より先き淀の御方と共に天守に登らせられし秀頼卿、速水、大野等に警護せられて、更に月見矢倉といふに移らせられしが、其處にも火焔及びしかば、またも蘆田曲輪なるしかみ矢倉にぞ移らせたまふ。此の時までも母堂淀の御方は左右の附々をすら危疑せさせ、ひたと御臺所の傍に附き添ひ、束の間も御心をゆるしたまはず、或時はしかと御臺所の袂をひかへて放ちたまはざりしことさへあり。大野母子をはじめ、其他御臺所に頼り奉りて御母子の御命乞ひせまほしく思ふともがらの苦心いたづらとなり、あはれ、御臺所

も、御高運たぐひなき家康公の孫姫君、此のたびの御軍に全勝を収めさせられし當將軍家の御賀子に在しながら、空しく城内に閉ぢこめられ、不幸の豊臣家に殉じたまふべうぞ見えたりける。しかるにしかみ矢倉より更にまた所謂山里の櫓庫に移らせたまふ其の砌、修理亮が母大藏卿、いさゝかの隙を得て、扇櫃の葉等に内意を含め、辛くも落しまぬらせけり。御臺所は夢路をたどる御心地にて御魂も身にそはす、梶の葉其他の女ばらにしるべせられて、猛火黒煙のうづまく中をば落ちたまふ。

さるほどに火勢ますます熾になりて、城兵はいよく狼狽へ感ひ、寄手はますます勝に乗つて、堤を切つたる津浪の如く、一齊に閨の聲をあげて亂れ入る。苟くも恥を知る城兵等は、死ぬべき時節到りぬと、力限り奮戦して、敵の刃弾に命を落し、或はさしちがへ、或は本丸の石垣に枕をならべて割腹す。彼の渡邊内蔵介は、往ぬる日天王寺口の戦に重傷を負ひて起つこと能はず、此時まで空しく打臥してゐたりけるが、今は斯うと覺悟して母正榮尼に訣別を告げ、潔く切腹して果

てけり。かゝりしかば残る烏合の兵卒等は蜘蛛の子を散らす如く亂れ走り、天満川、長良川、京橋等、八面へ人なだれを打つて落ちてゆく。其他あまたの女わらへ、老人、病兵など泣き叫び、あわて走り、燃えおつる様に撃たれ、煙につつまれ、火に焼かれ、劍電血雨の下をくぐりて、逃れいでんとあせるものから、或は踏殺され、或は切殺され、をめき叫び、うろたへ感ふさま、無漸といふもおろかなり。かくの如くにして火に焼かれ、堀の水に溺れ、祀らぬ鬼となりしもの、眞に幾何といふ數を知らず。東軍の討取し首ばかりも、無慮一萬四千五百三十三級とぞ聞えし。

其二 一二の丸内の亂戦

(や) 下手奥へ寄せて斜に開放したまふの城門を内面より見せ、それより上手一面の高石垣、

すべて郭内より玉造口を見たる體。小銃亂發の音聞える。ト奥の方にて鯨波もドツとあがる。門外より城兵大勢、思ひ／＼の武器を持ち、さん／＼に敗れて逃げ来るを、東軍大勢にておひかけ來り、門内にて暫くゴツチャの立廻りあり。ト城兵敵はす向うへ逃げる、東軍一同追うてはいる。ト上手より庖丁頭大住與左衛門(年齢四十五六)武家の料理番の服装、袴の服立を取り、禰むけ、かひ／＼しく一刀を腰にさし、あわた／＼しく驅け來りて、あちこちと人を求むる／＼なしよろしくありて、一度門外へ走り去り、又すぐに戻り來りて、よきところに立ちどまり、揚幕を見て懸念の思入。

與

どこへ行きなすつたか。たしかに此方へござらしやつた筈だが……白地に葵の御紋ぢらしの、被衣をめしたお後姿は、てつさり御臺さまに相違ないと、お跡を尾つてかけたしたが、前も後もうづまく煙、人なだれを打つ今の騒ぎで、お後影を見失ひ、とう／＼はぐれてしまつたが、何にをいつても女中の脚、よもや遠くはゆかつしやるまい。……何方へ

おこしなされたか。……お怪我はしつしやらぬか。……エ、氣のもめることだわい。

(ト行きつ戻りつして氣づかふ／＼なし。この時揚幕にて鯨波聞える)。

ヤ、あちらからも攻込だか。……こりやからうしてはをられぬわい。

(ト下手へ逃げうとする。こゝへ向うより赤裸體の上へ鎧腹巻をした若武者一人長巻を揮つて東兵二三人と激しく立廻りながら門近く駈けて來る。與左衛門あわて、石垣の蔭へ隠れる。若武者は目覺しく動きて己れも手を負ふ。途端、又鬨の聲。ト揚幕より手紙を貰うたる一群の城兵(大概素裸體に鎧を着し又は全く素肌のみ)大勢の東軍と血戦しながら門近くへ來り、又大ゴツチャの立廻りとなる。同時に揚幕より城中の老弱男女——茶道坊主、肥つちやうの婢、腰のまがりたる老女、老爺、小童など——大勢、おもひ／＼の服装にて、こけつまるびつ逃げ來り、此立廻りの間を縫つて落行かうとして雑沓する。此間をかしみいろ／＼あるべし。ト落人は、半分は門外へ、半分は上手へ散り、城兵は下手へ、

東軍も之れを追うて下手へはいり、本舞臺は東軍二人と城兵二人とのみ残り、尙激しき立廻りあり。此間與左衛門は石垣の隙に身をひそめて様子を窺つてゐる。ト、城兵は血みどろになりて斬り倒される。東軍二人は斬り倒したまゝ、血刀をひつさげ、急ぎ足に下手へはいる。トすぐに揚幕より扇楳の葉、甲斐々々しき打扮にて一刀を腰にさし、手に長刀を持ち、白地に葵の丸の紋ちらしのかつぎをぬしたる千姫君の手を引き、あわたゞしく驅けて出る。すぐつゞいて腰元、花野、同じく錦木、これも甲斐々々しくいでたちて走り出で、一さんに本舞臺へ來り、楳の葉左右へ思入あつて)

楳 モシ、此の間に早う。

(ト直に門外へ出ようとする。ト此以前石垣の隙を出たる與左衛門つかく、と前へ走いで)

與 ア、モシ、おまち遊ばしませ。楳の葉さまではござりませぬか。(ト躊躇みながら) 私しが御案内いたします。マ、おまちなされませ。

(トこれにて振り返り、皆々立ちどまる。楳の葉は與左衛門を見て)

楳 オ、さういやるは大臺所の……

與 へい、與左衛門めてござりまする。そちらへおこしなされましてはお危険うござりまする。こちらを廻つて追手口へ。(トいひかけて、千姫に敬禮し) 恐れながら御臺さま、必ず御懸念遊ばしするな。私しめは本多さまの、豫て御内意うけましたるもの。

(トいひかける。楳の葉ひとつつて)

楳 この男が最前申上げました、本多佐渡守どの、吩咐にて、御城内に入込みました大臺所の大佳與左衛門にござりまする。

千 そんならそなたが噂に聞た常磐木とやらともろともに……

與 へい、さやうでござりまする。大臺所に隙を見て、火をかけましは、手前でござりまする。それと申すもあなたさまを、お救ひ申し上げ



たいためばつかりてござります。委細のことはいづれ後程……かういふ  
うちも心が急ぎます。サ、かうおいてなされませ。

(ト奥左衛門上手へ廻はらうとする。ト少し前に息吹きかへし森きぬたる手頁の城兵、よろめきながら突と起つて)

城  
うぬ。

(ト血刀を揮つて奥左衛門にかゝる。驚きながら二三度やりちがはせ、両手にて城兵の揮上げた腕をおさへ)

奥  
こゝかまはずと、ちつとも早う。

(ト腕を押へた手を突然と離し、身をひく。ト城兵はよろ／＼とつんのめり、今一人の手頁ひにつまづく。此間に梶の葉は御臺所の手をひき、花野、錦木ついて急ぎ上手へはいる。つまつかれて今一人も息を吹き返し、これもよろめきながら、以前の一人と共に半夢中に

て奥左衛門に切つてかゝる。ひつばづして一刀を抜き、忽ち一人をしとめ、返す刀に他一人をも斬りたふし、きつと下手へこなし。又ドンチャン。関の聲。

幕

事前の事情

さらぬだに打撃つたる八日の大空一面に黒煙うづまきはびこり、大夏高樓の焼け  
 落つる爆裂の音すさまじく、人の世もけふに盡くるかと思はれけり。加賀爪甚十  
 郎、豊島刑部の兩人が、大御所の命を承つて城内に入りしころは、已に前にも  
 いへる如く、秀頼卿はしみづをたちいでられ、御母堂の方ともるともに所謂  
 山里の繡庫に移り、こゝにて、一同生害の用意あり、大野修理、毛利豊前、氏家  
 内膳をはじめ、正榮尼、大藏卿、饗庭の局など、男女老幼隨從し奉つたる者  
 三十有餘人とぞ聞えし。さる程に豊島、加賀爪の兩使は、井伊掃達頭直孝が兵に  
 警護せられて、件の繡庫に近くまかり向ひ、大御所よりの御使ひと名宣り、まづ  
 正榮尼、大藏卿の兩老女を召しだし、使命のあらましを語り『ゆめく御母子  
 とも、聊爾のことあらせられぬやう力めて諭しまゐらすべし』といひ含め、聽て  
 改めて大野修理亮治長を呼びだし、大御所の命を傳へて曰はく『戦争已に終り

ぬる上は、秀頼殿御母子に對しては、別に申しださるゝこともなし、太閤以來  
 の御舊誼、いかにも忘れがたく思召さるゝによりて、此後御他念なきに於ては  
 お母公淀殿の御隠居料として若干の御知行をも下し賜はらんの恩命なり、謹みて  
 命を奉じ速に營城を出でらるべし』と片桐且元參入の由は只一言も申し添へで、  
 といいかめしくぞ述べたりける。かゝりしかば大野修理亮は、さながらに聞え奉  
 るべうもあらじ、と聊々取りつくろひて復命す。毛利豊前、氏家内膳等まづ互ひ  
 に面を見合せ、秀頼卿の御氣色を窺ひ奉る。秀頼卿のたまふやう『去年以來、我  
 我母子の爲に命を捨しもの幾何といふ數を知らず。豊臣の社稷重からざるにあら  
 れど、喪家の犬の殘物に尾を掉る如く、かゝる薄待に取り纏りて命を惜まんはい  
 と恥かし。其の使者速かに辭し返すべし』とおほせける。修理亮押し返して『兎  
 も角も此儀御母公淀の御方にも御協議あつて然るべし』と申す。初めは御母子と  
 も庫の階上におはしけるが、千姫君を竊かに落しまゐらせけるより、遊殿みこ  
 ころ亂れたるやうにならせられて、女房等介抱に狼狽し、階上これが爲にみだり

がはしかりければ、秀頼卿は此以前臣下と共に、更に階下に渡らせて、修理の復命を聞かせたまひき。されば修理亮は母大藏を病かは招き、あらためて使者の口上を傳へ、御母公の御意向をうかゞひたまへといふ。さる程に氏家、毛利は、修理が説に反對し、階下には議論沸騰せり。時に鯨波砲聲はしづまりたれど、疾風火の粉を散らして櫓なんどの焼落るにやあらん、爆然として鳴りひびく物音、  
 かしこに屢々聞ゆ。

其三 城内山里繡庫階上

(正面及び上下ともに繡庫の三面を内部より見たる體。窓、かしこにあれど皆閉切りあり。すつと下手よき處に障子の障口、始終、こゝより出入する。其奥下手寄の壁際には繡伎

澤山積上げあり、又疊も二三疊立てかけてあり。障口より稍上手前寄に高麗縁の疊一片、これは秀頼の御座に充て、尙や、上手奥へ下げて高麗縁の疊幾ひらか据ゑて淀殿假の御座に充て、其背後に桃山式の金屏風、金時繪の調度二三種、長刀など。今しも淀殿は手に千姫が脱棄の上被を搦掴みて怒り狂ひながら、階子口を駆け降りんとするを、正榮尼、大藏卿、雲庭の局其他腰元ら大勢、立懸り抱き止め、辛じて高麗縁の上まで伴れ戻る。下淀の方俄に癪を起して、激しく反送らうとする。總が、りにて取りおさへる。途端に大筒小筒の音。民の聲。淀の方やうくしづまる。

正 豊臣家の御血統を、繼ぐも繼がぬも此一時といふ切迫つまつた折も

大 いつもよりも激しいお瘡氣。

變 お合ひ薬の用意もなし。

正 あゝ、困つたことではある。

(下遊の方又うめきて反返らうとする)。

腰元 あれまたお反り遊ばしまする。

皆々 (又立懸りて) 御前さま〜。

(ト此時階下より大野修理亮、鎧姿、黄色の陳羽織を着し、腕に薄手を負ひたる體にて白布にて巻き、大わらはにて上り來り、此の體を見て驚き)

修 ヤ、御方には……さては又もやお瀧氣が起りましたか。

正 オ、修理亮どの。よいところへ。

大 オ、治長か。(ト腰元に向ひ) 必ず手を離すまいぞ。

修 どう遊ばされたのでござります。最早お落附遊ばされましたか。

大 さ、少しはお落附遊ばしたやうぢや。

(トこれにて大藏と正樂とは、宜しく下手の座に戻りて、修理亮と向ひ合ふ)。

大 最前も一寸いうた通り、梶の葉に吩咐けて、御臺さまを窺かにお落し

申したゆゑ、御方さまには烈火のやうにお腹立遊ばして『たつた一人の

大事の人間を逃しをつたからは、どいつもこいつも關東へ内通に相違な

い、心變りぢや、裏切ぢや』とおつしやつて、それは〜怖しいお形相。

正 御臺様の御打掛の、残つてあつたを、あれ、あのやうに、しつかりと

お掴み遊ばし、お守り刀で、生きた人を刺すやうに、刺通し〜『ヤイ

家康め〜。エ、せめても此奴を弄殺しに、道連にして、己れの鼻を

あかせうと思つたものを。エ、くちをし〜』とおつしやつて……

變 (ト此時少し膝を進めて) お止め申さうとする 私共をば突きのけはねの

け、あつちこつちとかけまはらせられまして、御正體もない御有様、其

中に例のお瀧氣が俄にさしこみ、只今の爲體。

大 それやこれやて先刻の、お使者の口上なかなかに申し上げる暇もなかつた。よし又申し上げたればとて、此みけしきでは、迎も〜御降参の事御承引遊ばさうやうもない。……治長、ま、何としたものであらう。

正 修理亮どの、何としたらようござりませうぞ。

(此間澄の方又反返らんとするを、響庭及び腰元共よろしく取りおさへる。)

修 いかさま……かうした御様子では、彼の一條を申上げやうもござりませまい。とはいへ、只今直様御返答無きに於ては、何分にも亂軍の折柄ゆゑ、如何なる間違が出来たすまいものでもござらぬ。もとより右府さまには、母君の嚴命ならば是非に及ばぬことなれども、おのが一命を助けん爲には、決して降参の恥辱は受けぬ。豊臣家の今日あるは、定まれる運命と思ふ間、其方共強ひても母君にお覺悟をお勧め申し、使者へ

は不承諾の旨返答せよとの仰せてはござれども、一寸延びれば尋延びるの譬。ともかくも、一應御降参の事御承引申させたく……

正 さ、我々とても同じ心、せめてはお上のお命程はと、心をば碎きますれど……

(ト皆々歎息のこなし。此うち修理亮きつと思ひ定めたる體にて、膝を進め)

修 母上、此上は是非に及びませぬ。假令御正氣でいらせられませうとも、あくまでも御疑念深き御生來、根深く徳川家を怨ませられ、常日でも、たとひ死ねばとて家康の面は見ぬとのお言葉なれば、生中表だつて申しあげなば、お聞入なきは必定。此上は……

(トこなし。正樂大藏心得膝を進める。修理亮は低聲にてさやくこなし。)

修 お正氣の無きこそ幸ひ、御方さまには御承引と申しこしらへ、ともか

くも御出城のことに取計らひませう。

大 では我君をおだまし申して。

修 たばかり奉るも、一へにお家の爲でござる。では早速申し上げませ

う。御如才はござるまいが、とくと人々にも心得させて、御正氣無きは

物怪の幸ひ、後程我君よりお尋ねでござりましたら、必ず共にお心をつ

けられて、其お答に齟齬のなきやう。

大 大丈夫でござる。氣づかひ無用。

正 では時刻の移らぬうちに。

修 心得申した。

(ト修理亮急ぎ階を下りる。ト淀の方俄に氣味わるき聲にて笑ひいだし、また泣きいだす。腰元共騒きたつたを、老女どもこなしにておし鎮め、淀の方を介抱する。)

大 御前さま。

正 御方さま。

皆々 もうし〜。

(ト此途端、奥の方(窓外)にてどつと鬨の聲、同時に石火矢の流弾が窓に申り、壁が夥しく

く墜れ落ち、窓際に積たる構儀がころ〜と轉げ落ち、煙が一ぱいに庫の中へ流れ込む。

何が焼落るのか、凄じい物音が續く。此一發は餘りに意外、又餘りに耳近であつたので、

皆々覺すびつくりして、押へてゐた淀の方を手を離し、左右へはつと飛退き、思はず俯伏

になる。ト淀の方きつと身を起し、忽ちつか〜と前へ駆けいで、正面をきつと覗んで)

淀 ヤ。また來をつたな。

(ト突たつてぶる〜と身をふるはせ)

おのれ、どうあつても祟らうてな。

淀

祟らうでなく。

(ト懐刀に手をかけて、抜かうとして物に怖えるやうに、たちくと二足三足退りながら)  
(此うちに皆々はつと心附き、左右前後から駆寄つて抱止めようとする。それを突きとばし  
くして身もだへする。)

(此時豊臣秀頼卿(廿三歳)緋威の鎧に太刀を佩き、毛沓を穿きたるまゝにて、先に立ち、氏  
家内膳(四十位)これも同じく鎧姿、處々痛手を負ひ、白布にて巻き、附いて上り来る。  
皆々見て、敬禮しつゝ、淀の方にそれと知らせる。)

大 ア、モシ、お渡りてござりまする。

正 右大臣さまの、モシ、お渡りてござりまする。

大 御前さま、お上のお渡りてござりまする。

正 モシ、お心たしかにお持ち遊ばしませ。

(ト淀の方きよろくと左右を見やりて、目尻をつりあげ)

淀 何ぢや。右大臣ぢや。右大臣とは、秀頼殿は日本の武將、征夷大將軍

ぢや……征夷……(トいひかけて、いかにもくやしげに、じつと向うを見つめて) エ、

くちをしや、誰れあらう、征夷大將軍秀頼の母を……

(トさめんと泣出す。鑿庭介抱しようとして寄ると手荒く突きのけ)

おのれ、ようもく。 (ト急に目に角立てて) 何ぢや。妾ぢや。妾とは何

ぢや。今一度いうて見い。最一度いうて見い。……ヤイ、此日本四百餘

州は、みづからが化粧箱も同然ぢやぞ。(しばらく無言で睨みつけてゐて) フム、

面白い。聞きませう。

(ト誰かの言葉を聴いてゐる思入。やがて又急に氣色ばんで)

ヤア誰れかある。治部少輔呼びや。……治部少輔……

(ト急きまによりくと立上たてあがりがり、皆みな々々が驚おどろきて止とどめようとするを突つきのけて、上かみ手てへ駈かけ行ゆく  
うとする。皆みな々々へへかれる。)

嬰あな ア、申まをし、淺あさましい。お心こころおしづめ遊あそばしませ。

皆みな々々 もうし〜。

(ト皆みな々々棄すてりふにて押おしなだめる。此この時ときまで愀しつぜん然ぜんとして石いし像ぞうのやうに立たつたまゝでぬたる秀ひで  
頼たのは之これを見みて歎なげ息いきし)

秀ひで 淺あさましや、母は上うへには、こりや御み心こころが亂みだれしよな。

(ト愀あう然ぜんとして下した手ての設まけの座ざにつく。氏うぢ家いへ内うち膳ぜんは堪こらへられたらしく、淀よどの方かたが抱かかきすくめ  
られて座ざにつきたる其その前まへに手てをつき、じつと其その顔かほを見みあげて)

氏うぢ 恐おそながら……テモサテモ、お情なさけなき御おん有あり様さま。御おん大だい事じの折をり柄からとて、積つり  
に積つつたる御ご心しん勞らうの一時ときに相あ發はつし、御ご本ほん性しやうをお失うしなひ遊あそばされましたか。

イヤ申まをし、豊とよ臣とみ家いへの御ご榮えい辱じやくは、千せん百ひゃく年ねんの後のちまでも、貴あなた女なさまの御ご言こと葉は一ひと  
つて定さだまりまするぞ。御ご孝かう心しん深ふかき右う大だい臣しんさま、唯ただ御おん方かたのお言こと葉は次し第だいで、  
如何いかなる御ご耻ち辱じやくをも忍しのばせられます。併しかしながら圖はかりがたきは關くわん東とうの  
下した心こころ、今日こんにち御ご降かう參さん遊あそばすは、千せん歳さい磨ましがたき豊とよ臣とみ家いへの御ご耻ち辱じやくと存ぞんじます  
るぞ。何なに卒しとみこゝろを鎮しづめさせられ、篤とくと利り害がいをお考かんがへ遊あそばされ、辱しめを  
蒙かぶつておめ〜御ご降かう參さん遊あそばすよりは、潔いさぎよくお覺かく悟ごあるか。……但たゞしは修しゆ  
理りへの命いのちの如ごとく、徳とく川がはどのに縊すがらせられ、慈じ悲ひ憐れん愍みんを乞こはせらるゝか。  
……あらためて御ご返へん答たふ下くだされませう。

(ト氏うぢ家いへ涙なみだを含ふんでしみる)と説せつ得とくする。此この間ま淀よどの方かたはじつと氏うぢ家いへの顔かほを見みつめてをり、申まを  
ころよりだん〜と居ゐすまひを崩くづし、氏うぢ家いへの言こと葉は終はつると)

淀よど マ、よいわいの〜。何なんのマアそのやうに、氣きにかけるには及およばぬ。



マ、こゝへ来て……ハテマア、こゝへ……

(トなまめかしく手を延ばして氏家の手を取らうとする。氏家驚きて身をすさる。淀君すい  
さすすりより)

ハテ、何のにげることがあるもので……

(ト正榮尼左手より袖をひかへて止めようとする。淀の方きつと見返りて)

誰が指さす。……

(ト目に角立てる。正榮尼止めようとした手を控へる。)

誰が答める。……

(ト右の方にゐる大藏を見返りてきつと睨む。大藏も顔をそむける。)

みづからは天が下の主も同然。……

(ト大きく傲然といひ放つ。皆々うつつむく。)

何者が見ようとせよ。(ト又なまめかしく) ハテ大事なわいのう。

(トしどけなきこなし、又氏家の手を取らうとする。氏家驚きて一二間此方へ飛びすさり、  
冷汗を流し、身をふるはせつゝうつつむく。)

ア、コレ、どこへ……

(トしどけなき姿にて立上りて追ひすがらうとする。昔々秀頼卿の心を察して、聞くに堪へ  
かれ、さしうつむいてゐたが、此時あわてゝ左右より抱きとめる。ト淀の方忽ち面色を變  
へ、俄に身もたへして、恐怖の思入。)

ヤ、みづからを捉へうてな。(トあわてゝ上手へ逃げようとして) ヤア、たそ  
無いか、たそないか。……何ぼうても囚人には……ならぬ……

(トもがき狂ふ。最前より母の有様を見て、無限無量の苦痛の其面にあらはるゝを禁じかれ  
てゐたる秀頼は、此時こらへかれて、はらりと落涙すると同時に、突然佩刀の鞘を拂ひ、  
突と駆けよつて淀の方の胸元に手をかけ)

目幕二

秀

南無阿彌陀佛。

(トいひもあへず直に突かんとする。大藏、正榮、響庭仰天して左右前後より其手にすがりて)

大

こりや何と遊ばしまする。

正

恐れながら上さまにもみこゝろが……

響

狂はせられましたか。……マア……あぶない。

正

おあぶなうござります。お手を……

三人

お手をお離し遊ばしませ。

(ト皆々棄ぜりふにて、泣きながらよろしくとめる。)

秀

退け……。離せ……。所詮助からぬ母上の御命ぢや。此上存へさせま  
ゐらすときは、御身の恥辱、家の大辱、秀頼みづから御介錯、返す及に



死出三途の御道しるべを仕つる。止めるな。離せ。そこ退け。

纏

(泣きながら) サ、其お歎きもお怒りも、お道理とも、ことわりとも、御尤とも、當然とも、申し上げる言葉もござりませねど、何を申すも此

のやうに、御本心無き御有様でござります。

正

たとへ御最期遊ばすにもせよ、一旦御本性に復らせられました其上で、御得心の其の上で、御生害をお勧め遊ばし……

正

我々共もともく……  
三人 今一度お言葉かはし、冥途の御供仕りたうござります。

纏

今に御本心に成らせませまするほどに……  
三人 暫く……。

(トいづれも泣きながら、さまざまにとめる。此の間胸元を紐れたる淀の方は、無言にて、い

淀

アレ、此の人は〜。どうしやる〜。

(ト秀頼こらへかれ、手にもつたる小刀を擲いだし、其のまゝそこにドウと座して、落涙雨の如く)

秀

ヤイ内膳、ゆるしくれよ。女々しと思へどとゞまらぬ、涙は同じ涙なれど、最前落せし熱湯は、父太閤の偉業をば、此身ゆゑに滅すかと、不肖を悔む慚愧の涙、今ふりしぼる此の涙は、愧も忿怒も悔恨も、人の心にあるとある、百八煩惱一つとなつて、五臓六腑を骨もろともにしめぎにかけ、しぼりいだす血の涙ぢや。ゆるせ、泣かすにはをられぬわい。

(ト身をふるはせ、両手にて面を掩うて泣く。氏家も同じくこらへかれ、無言にて痛歎のこなし。皆々もうつむきて愁のこなし。淀の方は二人の貌を見くらべ、氣味わるき聲にて笑

ひだし

淀

ハ、、、。お泣きやる〜。男ぢやに、此の人たちは。……オ、をかし。オ、をかし。ハ、、、。(ト正體なく笑ひこける)。

正

エ、お情ない。淺ましや。現在御血を分けさせられし右大臣さまの御顔に、お見おぼえさへないかいのう。

(ト泣く。裂庭も泣きながら膝を進めて、淀の方の手を取り)

鑿

モシ、御前さま、御方さま。マ、こゝへ、御座あそばせ。(ト秀頼の方を指さし) コレ、あのお方が、あなたのお目には見えませぬか。

(ト鑿庭起つて淀の方の手を引きつゝ、秀頼の傍へつれゆき、秀頼へこなしあつて)

此御方を御存じないか。

(トよろしく口説く。淀の方しばらく秀頼の貌を見てゐて)

淀 オ、この人は知つてゐる。わしが子の秀頼ぢやわいのう。(ト手輕に言ふ)

鑾 ヤ、すりやお正氣にならせられましたか。

秀 ナニ、ようござんじとや。(トじつと淀の方を見やりて) さてはお心が落附きましたな。(ト膝を進め) 御正氣にならせらるゝ上は、改めて申し上げねばならぬことがござりまする。母上、只今秀頼が申す事を、ようお聞き下されませうぞ。

(ト秀頼容をあらためて、淀の方の前に兩手をつきて、言葉しづかに)

最前修理亮へお吩咐ありし使者への返答の儀にござります。豊臣の血統を維ぐ爲に、せめて秀頼だけは出城させよとのお慈愛のお言葉は忝けなうはござりますれど、たとへ大御所の慈悲に絶つて、一旦は母子命

淀 オ、く、そなたの面一ぱい、水かけたやうに涙が流れる。オ、く、そちらからも流れる。オ、く、オ、く、こちらからも流れる。アレ

助かるとも、つくく關東の下心を察しますれば、豊臣の血統は、所詮永うは繋がれませぬぞ。慈悲を施すは大御所が一時の權略に過ぎませぬぞ。生中に生き存へて、他日の恥辱を蒙るよりは、潔く生害いたし、あの世の父上に不肖の御詫び……(ト言ひかけて涙をぬぐひ) 母上とても最前までは其のみこゝろと、心を安んじ覺悟いたしをりましたに、只今修理へのお言葉は、日ごろには似ぬ御末練千萬。(トきつく言つて涙を呑み) これといふも畢竟は、此の身を不便とおぼしめす御恩愛の餘りと思へば……

(トいひかけて後をいひかれて泣く。淀の方、其顔を如何にも不審さうにしげくと見てゐて)

アレ流れる〜。オホ、。

(ト皆々驚く。秀頼も驚きて顔をあげ、じつと淀の方の面を見つめてをり、ト情なげに)

秀 エ、たはひもなき御有様。(ト齒をくひしりてうつむく)

淀 (皆々の貌を見くらべて) ハ、ハ、ハ、ハ、。

(ト正體もなく笑ふ。秀頼落涙にくれて立上り、元の座に歸る。皆々愁然として言葉無し。此時大野修理亮いそがはしく上り來り)

修 使者より重ねて厳しき催促申し參り、返答によつては直にも石火矢を

打掛け申さん勢ひを示しましたるゆゑ、改めて上意うけたまはりまする暇もなく、小臣只今罷り向ひ、御母公様の命をいたゞき、ともかくも君御承諾の趣をば申し傳へてござりまする。

(ト氏家内膳之を聞き驚きたる思入、忽ち氣色ばみて修理亮に向ひ)

氏 ヤア、案外千萬なる其計らひ。其許は君を辱しめ奉るを臣下の本意

と心得らるゝか。見よ、御母公の御方には、まッこの如く御正體もなき御有様。取亂させられた此お姿を、關東の下司雜人の指目に曝し、恐れ多くも豊國さまの、お名まで汚さん所存なるか。

(トきつといふ。これにて修理亮もむつとしたる思入、されどわざと落附きて)

修 ハテお騒ぎめさるな内膳。不肖ではござれども修理治長、君の御耻辱と相成るやうなことを何て取計らひ申さうや。只今兩使節と種々談判の末、然るべき御輿持參するやう篤と命じおきましたれば、誓つて御尊容を人目にさらすやうのことはござりませぬ。身共の取計らひを案外なりとお咎めあれど、御降參の儀は御母公様の御意でござるぞ。さやう申さるゝ其許こそ君へ對し慮外でござらう。(トきつといふ)

氏 いや、第一、その御母公の御意といふことが心得がたい。御母公には、先刻以來引續き、斯く御正體もなく渡らせられたと存せらるゝ。さすれば、さやうのお差圖遊ばさるべき機はない筈。察する所、こりやおぬし自身に命惜しさに、御母公の御意など申し拵へ、強ひても御降參をお勧め申さうといはしたのに相違あるまい。

修 だまりめされ、氏家内膳。おのれが心に引きくらべてか、申し拵へたなど、は、無禮至極の申し條。

氏 おのれが心に引きくらべてとは、よう申された。日頃から御母公の御最負あるを笠に被て、おぬしら親子が目に餘る無禮緩怠。事のこゝに至つたも、元はといへばおぬしたち親子が不所存故ぢや。

修 ナニ、我等親子が不所存故とは。

氏 いかにも。

修 その仔細承はらう。さ、承はらう。

氏 オ、申さう。

(ト双方共に刀の柄に手をかけぬばかりにして意氣込む。)

秀 兩人ひかへい。

兩人 ハ、ア。

(トひかへる。淀の方あちら向きに打臥したるまゝ、だしぬけに、二人の争論を嘲けるかのやうに)

淀 ハ、ハ、ハ、ハ、。

(ト笑ふ。ト正安尼しづかに秀頼の前へ進み、うやくしく手をつきて)

正 恐れながら我君に申しあげ奉ります。御母君の御最期のお言葉に

背かせられましたは、何ぼうにも君御不孝と後の世までも取沙汰。何卒一時の御耻辱を忍ばせられましたて、お家百代の御爲に、まげて御出城遊ばしまするやう、恐れながらお諫め申しあげまする。

(トいひ終るが終らぬに)

淀 ハ、、、。

(ト又嘲弄するやうに笑ふ。大藏卿もまた泣く。膝を進めて)

大 ことには、あれ、あのやうに、御正體もなくいらせられまするを、否應なしに、無慚の御最期させまするは、『どうあつても助けてくれ。死なぬ』とおつしやりました其お言葉を思ひ出せば……

(トいひかけて、いひ泣みつゝ泣く。修理亮ひとつとつて)

修 御高恩蒙りし我々ども、助け奉る術なくば兎も角も……

正 現在お使者が御興まで用意いたしてまゐるとあれば……

襲 お家の爲でござります。……

正 御母公さまのお爲でござりまする。……

大 何卒みこゝろを曲げさせられまして、ともかくも御出城遊ばしますや

ろ。……

正、大、襲 お願ひ申しあげまする。

腰元皆々 お願ひ申しあげまする。

(ト皆々よろしく手をつきて秀頼に願ふ。淀の方は此以前に起直りて様子を見ろくと見たり、此時又)

淀 ハ、、、。

(ト嘲るやうに笑ふ。秀頼じつと思入、やがて忿然と一同を見やりて)



秀 一同の願ひといひ……

(トいひかけて淀の方へ思入ありて)

あの御姿を見るにつけ『死ぬならば必ず一しよに。訣別の盃を取りかはして、潔よう死なうほどに、必ず誑すなよ、偽つて殺すなよ』と往ぬる夜御持病募りし折、御邪推が七分の、御怨言の其中にも、三分はまじる御慈愛の、其御心根が目にあり……

(トいひかけて眼をしばたき、うつむきて涙にくる、思入。淀の方きよろしくと皆々の顔を見比べてゐる。)

修 すりや一同の御願を、君にはお聽入遊ばされますか。

氏 すればアノ御降参を。

(ト意外の思入。皆々は嬉しげに)

皆々 アノ御出城遊ばしまするか。

(ト此途端、淀の方は、ふと千姫の打掛の最前のまゝ秀頼の座のこなたに落散りあるに目なつけ)

淀 ヤ。千姫……

(トつかつかと駈よりて打掛を掴まうとしてよろめくを、秀頼押へて、其顔をじつと見て)

秀 如何なる恥辱も……

(ト淀の方をおしすゑながら)

母上にはかへられぬわい。

(ト落涙のこなし。淀の方は、打掛をきつと掴みて、くやしげに向うを睨みて立ちあがりながら、身をふるはせる。皆々よろしく愁の思入)

幕

四幕目

其一 本丸の高石垣際

(正面一帯に高石垣、こゝへ向うより井伊掃部頭の臣杉本次郎左衛門、兜をかぶり、鎧姿にて其部下三四名に石火矢一門を牽りせて急ぎ足に出て來り、石垣際へ來ると、差圖して部下を上手へ送り込み、杉本だけ残る。こゝへ下手より同じく井伊の臣甲乙、鎧腹巻、おのゝ手鎧を提げて出て來る。)

杉 何とおのゝがた、末路とは申しながら、さてゝ淺ましいものでござるな。豫て無き身と存ぜぬかして、右大臣秀頼ともあらうものが、おめゝ御憐愍のお沙汰に絶り、然らば出城仕ると、御使者に御返答致せしとやら。

甲 臆病者の大野修理が、お傍に附添ひをるからには、命をしさに恥を忘れ、或はさやうの御返答もしかねまじと存じをりしが、流石に面目が無いと相見え、右大臣御母子の爲に輿下し置れたしと、刑人の贅澤三昧。乙 牛は牛づれの片桐且元、豫め大野修理が、かく御返答仕らんと承知致しまかりあつた歟、今朝茶白山の御陣所へ、輿準備し參着なし、大御所さまのお慈悲に絶り、お迎ひの役目申乞ひ、入城なすは奇怪至極。杉 打棄おかば取りも直さず、禍根を百年に貽すの道理、まつた臺命にも相そむけば、かやうゝに取計へと、我が君の御内意うけ、出陣の騒ぎに事よせ、過誤にもてなして、燃え残つたる篝火にて、彼れが準備の輿二挺、まんまと首尾よく焼きたてたれば……

甲 案にたがはず狼狽なし、再度輿の準備に及び、人を諸方に走らすうち

目幕四

餘程時刻も移つたりしが……

乙 いまだに入城いたさるは、準備が調はぬと相見えまする。

杉 最後の御談判も今一刻。

甲 お使者さへ退出あらば……

乙 一舉に事を決する手筈。

杉 ハテ、こゝちよふ……

三人 ことごとござる。

(ト此時、下手より本多家の家臣某、兜をかぶり、鎧腹巻、手鎗を提げて急ぎ足にて出て來り)

某 方々は井伊どの、御家來衆ではござらぬか。

杉 さやう仰せらるゝ其許は、本多どの、御重役。

甲 シテ、何事の……

三人 御用でござるな。

(トこれにて某、なたへ近づき)

某 早速ながら、片桐市ノ正且元、程なく此のところへ參着いたせば、御如才はあるまじけれど、豫てのお手筈必ず共に御油斷なさやう、何卒御主人へお傳へ下され。此の儀申し通せんため、驅つけまゐつてござりませう。

杉 すりや片桐市ノ正が……

甲 アノお輿の準備を整へ……

某 アイヤ、其準備は整はざれども、萬一時刻おくれし爲、間ちがひあつては一大事と、御輿準備の其の爲に、家來某を殘し置き、自分は最前

目幕四

の輿にて、子息出雲守孝利もろとも、中を飛ばせて程なく此れへ。御  
猶豫あらば何かと妨げ、片時も早く御處分あるやう。

杉 心得申した。しからは直さま我々どもは……

甲 此の儀を主人へ……

三人 申し傳へん。

杉 お役目御苦勞に……

三人 ぞんじ申す。

菜 さやうござれば。

皆々 ぞめん下され。

(ト杉本及び甲乙は上手へ、某は下手へ急ぎ足にてはいる。)

其二 本丸櫻門前

(上手奥へ下げて、斜に本丸の城門、門の前なぞへに架りたる幅廣き橋の左右は、水満々たる内堀。門よりすと奥下手へ斜に高石垣、角櫓などよろしく、天守閣も木立の彼方に餘り遠からず聳えて見える。上下共に、前の方は三四間もあらうといふ巨石を幾つも用ひ、築き上げたる高石垣。既に門内處々に火かゝりたりと見えて一面の黒煙、奥にて砲銃の音。爆發の響、建物の焼落つる音、鬨の聲。

やがて、向うにて六尺の掛聲聞ゆると共に、本多家の士二人鎧姿、急ぎ足にて片桐が輿を警護し、先に立ちて走りいづる。すぐ其の後について、六尺四人にて市ノ正が輿をかき、出雲守孝利其脇にひつそひ、大急ぎにてかけいづる。花道中ほどへ來ると出雲守輿の中をのぞき)

出 父上々々。お心たしかにござりまするか。……父上々々。

(ト懸念の思入にて口早にたづねる。輿花道のつけぎはまで来る。出雲守、走りながら輿の窓の簾をかかげ、中を見て)

ヤ、父上には。までくく。輿待て。

(トこれにて六尺輿をとどめる。案内の士もたちどまる。出雲守あわたしく輿の戸を開ける、ト市ノ正釣下げたる布切にしつかりとすがりたるまゝ氣絶してゐる。出雲守大に驚き、科介にて輿を下せと吩咐ける。六尺輿をおろす。出雲守手早く懐中より準備の薬剤を受りいだし、父の口を押ひらき合ませ、豫て輿の中に備へたる吸筒をとりいだし、水を飲ませ。さまざまに介抱する。此間皆々も手傳ふことあり。)

父上、々々、々々。一大事の折柄にござりまするぞ。お心たしかに持たせられませ。……父上さま、父上さま。

(ト呼ぶ。これにて且元息を吹きかへし、苦痛を忍ぶ思入ありて)

市 孝利か。お庫前へまゐつたるか。

出 イヤ、まだこゝは櫻御門。今しばしてござりまする。お心たしかに持たせられませ。

市 ナニ、櫻御門……

(ト且元きつとあたりを見て、はつたと怒り)

たはけものめが。刹那の遅速もお家の存亡と存じをらぬか。うつけものめが。……とつと、輿……

(ト言はうとして苦痛の思入。こらへかれて身悶し、半身輿の外へ轉びいづるを皆々立ちより介抱する。且元苦痛の間に『輿をやれ』ト命じようとして口のきけぬ思入。科介にて『輿をやれ』と命ずる。出雲守止むを得ず、且元を輿の中へ抱き入れようとす。此途端、又揚幕より、ばたくにて十河十兵衛(五十位)立派なる空輿を六尺にかへせ、其脇にひつそひ、大急ぎにて駈け出で、すぐに本舞臺へ来て)

十 ヤ、御主君には、又もや御病苦募らせられしか。

市 オ、まぢかねしぞ、十河十兵衛。輿の準備は整ひしか。

十 ハ、命にしたがひ處々方々と、手を分つて人を走らせ、尋ね求めてござりますれど、只一挺の其外は、如何にしても手に入り申さず、今村三右衛門を後にとりめ、尙尋ねさせてござりますれど、萬一時刻後れしため御用に立たずば詮なきこと、お城の御模様心に掛り、宙をとばせて御蹤尾ひ、驅けつけましてござりまする。

(ト流るゝ汗を拭ひ、息つきあへず言ふ。且元之を聞きて、くわつと眼を見開き)

市 孝利々々。

出 ハ、。

市 時刻已でに移つたれば、君の御上心元なし。我れに代り其方、其輿

を持参なし『大御所の御許受け、片桐市ノ正且元、右大臣さま御母子御迎ひの爲参上』と大音に申し入れい。かくいふうちも心懸り、我れもすぐさま後よりゆかん。はや〜おゆきやれ。はや〜。

出 心得ました。十兵衛、父上の介抱頼むぞ。

十 ハ、。

出 父上御免。……方々、御案内下されませう。

士 心得申した。

(ト出雲守六尺を促して十兵衛が持参せし輿をかきあげさせ、本多家の士に案内せられ、大急ぎにて櫻門より輿へはいる。又も火の粉降り、黒煙あたりに満つ。)

市 如何に老病とはいひながら、御大事の折からなるに、くちをしき我が有様。……ヤイ、十兵衛。……輿へ〜。

十 ハ、ツ。

(ト十兵衛市ノ正を扶けて輿へ抱き入れようとする。ト市ノ正又激しく苦悶し、科介にて十兵衛をとめ、辛うじて息をつぎ)

市 コリヤヤイ、十兵衛。我れ今輿を急がすときは、お倉前に到らずして、絶命せんこと疑ひなし。油断ならざる佐渡が胸中、大御所が心の底、我れ未だ死すべきならず。さりとして只今躊躇なし、まつた御輿不足せば、例の御母堂のお邪推より、如何なる間ちがひ……心もとなし。慮外なれども我が輿を……孝利の後おつかげさせい。……はやく〜。

十 おほせてはござりますれど、此お輿これなきときは、如何にして御病體を……

市 要らざる馬鹿念。戸板なりと、楯なりと、求めさせい。その輿、片時

も早う……

(トよろしくこなし。十兵衛心得同じく科にて六尺二人に輿を本丸へ急ぎかけつけと命ずる。六尺心得輿をきあげ、一さん門内へはいる。十兵衛はまた残れる二人にさゝやき、戸板やうのものを用意し來れ、と命ずる。二人心得て一さんに下手へはいる。此の間且元は地上に横さまに倒れ、左手を杖にして身を起し、苦しげに息をつぎて)

市 心得ず此の胸さわぎは。正しく病苦の故にあらず。御助命竟に叶はずしてお家滅ぶる知らせならぬか。折も折とて病苦募り、多年の苦心畫餅となり、千仞の功を一貫に缺くか、無念至極。(ト胸をおさへて大息つき) 豊國さまへの申し譯に、せめてもお家の社稷はどは、何卒百歳の後までもと、東西の間に奔走なし、大御所を説き、速水甲斐、大野修理、其他兩三輩同意させ、和睦の内約整うたりしが、只眼前の勝利を頼む野猪の如

き 浅智の輩、まつた二つには御母公の御猜疑深く、事破れんしたりし  
 ゆゑ、速水甲斐と申し合せ、勿體なくも、淀殿の御座所を目がけ、石火  
 矢を二度までも打かけし、其計畧圖にあたり、御母公果して怖れたま  
 ひ、お和議となつたりしは、お家の慶事と思ふにたがひし再度の役。  
 ……和議を勧めまゐらせしも大不忠となつたるか。(ト苦みながら急に又十  
 兵衛を顧み) ヤイ十兵衛、如何にしても心懸りぢや。戸板を待つ間もどか  
 し。我れを脊負うて、せめても御門内へ。……とく脊負うて御門内へ  
 ……

十 ハ、畏つてござりまする。

(ト十兵衛立ちより扶け起し、市の正を脊負はうとする。市の正十兵衛の肩にすがり、辛う  
 じて起ちあがり、二足三足歩む途端、門内奥の方にて、大砲一發、小銃連發の音すさま

じく、関の聲とつとあがる。)

ヤ、……

十 あの物音は……

(ト市ノ正覺えず肩に掛けたる手を離し、仰さまに顛倒し、倒れながら直に左手を杖に門  
 の方をきつと見こむ。十兵衛驚き、驅けよりに介抱する。)

市 じゆ・じゆ十兵衛。……様子を一。

(トこなし。十兵衛一さんに門内へかけ入る。市ノ正辛うじて身を起し、じつと門内を見  
 込みて大息つき)

市 しなしたり。手後れとなつたるか。事破れたるに相違なし。……我れ  
 餘りに大事を取り、機の熟するに時方ありと、中心竊に戦ひを期しなが  
 ら、大御所存命の其の間は、平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らさ



んと、思ふ心の偽りに、爲すことおのづから模稜となり、言行に矛盾の影を現じ、身方も誤つて我れを疑ふ。ましてや眼炬の如き當代無双の大御所をや。……我れ誦詐を以て對ふが故に、彼れまた誦詐を以て之れに應じ、其の業因滅せずして、一度ならず二度までも、關東の計略におちいつたるか。……

(ト此時天守閣のうしろに當りて、新に火の手盛んに揚り、楯庫燃ゆる體。

ヤ、あの火の手は……あれこそ正しく……

(トのびあがるはずみに、思はずもすつくと腰立ち、二三間堀の方へつかくと走り行き)

山里の……

(トいふ拍子に、よろしくとうしろ向のまゝよろめきつゝ、ト、尻居に倒れて血を吐く。

途端に門内より出雲守孝利一さんに走り來り)

出

父上無念至極にござりまする。

(ト市ノ正の倒れてゐるのを見て驚き、抱起し、さまざまに介抱し)

父上々々。

(ト呼ぶ。市ノ正目を開きて)

市

御大事去つたるよな。

出

憎きは井伊直孝、御輿を持參なせしに、直には御座所へ案内せず、

かにかくと事むづかしく、問答一兩度に及ぶうち、井伊の指圖か、安藤か、御座所を目がけ無法にも、切つてはなせし石火矢に、大事は破れてござりまする。

(ト奥を見込み、無念のこなし。市ノ正苦しき息をつき)

十

すりや右大臣さまにも、もはや御生害遊ばされしか。

出 一發はなせし石火矢が、お庫の牖の戸砕くやいな、あまたの鐵砲を連發なせば、かくと豫お覺悟ありしか、お庫のうちはしづまりかへり、忽ち四面の牖口より、うづまさいづる黒煙、閃く火燄炎々と、見る間にお庫は炎上なす。申すまでもなく御一同、御生害とぞんじまする。

(ト悲歎のこなし。此のうち城内の火の手はますく盛になり、天守閣も焼けはじめ。火の粉はげしく降りて黒煙また四邊を掩ふ。ト十河十兵衛、火の粉の下をくゞつて一さに門内よりかけいで來り、二人の前にとんと座し)

十 くちをしうござりまする。

(ト土にくひつきて泣く。)

出 すりやいよ〜御生害と定まつたか。

十 お母公さまをはじめ奉り、右大臣さま、大野さま、三十餘人の御方

方残らず御生害にござりまする。

出 チエ、無念……

十 若殿さま……

出 十兵衛……

(ト兩人顔を見合せ、本丸の方を睨み、こらへかれて男泣に泣く。ト出雲守きつとなりて)

出 十兵衛、父上の事はそちに頼むぞ。……父上、おさらば。

(ト血相をかへて門の方へかけゆかうとする。市ノ正眼いでぬた目をくわつと開きて)

市 うつけものめ。血相かへて何處へゆく。

出 せめても君の御吊ひに、當座の敵直孝めを。

市 たはけものめ。只一二人を敵とねらひ、匹夫の怨を報いんとならば、

此の且元、命二三十あるとて、今日まで存ふべきか。……さて。……坐

れ。

出 ちやと申して……

出 ハテまでと申すに。

市 ハ、ア。

(ト出雲守餘義なく下にゐる。市ノ正苦しき息をほつとつきて)

市 ヤイ倅、一人を敵と怨まば、此の且元をば、八裂には何故せぬぞ。……

：お家の滅亡を速うせしは、此の市ノ正且元。……去年御軍はじまりしまては、我れ只機を失せし他人の淺慮を悔み恨み、首鼠兩端の政策に、お家の滅亡を速うせし我が姑息の非を悟らざりしが、……我が初め招き集めし諸浪人、偏におのれが功名を欲し、只管匹夫の勇に驕る。彼等代つて政柄を執るに至らば、……大御所の威徳と孰れ。(ト大息つきて喘ぎ)

たとひ一旦は戦ひ克つとも、お家の滅亡十年の外に出でじ、と悟りし時の我が心中。(ト又苦しげに息をつきて) 此の上は是非もなし、せめても當家の社稷ほどはと、……心を碎きし御和睦が、仇となつたるけふの仕合せ。(ト遙に豊國神社の方を拜する思入ありて) 『大坂城を落さん手段は、暖より外になし』との、豊國さまの語を其ま、(ト出雲守に向ひて) 敵に教へし逆臣は、此の且元にてありけるぞや。天罰たちまち運り來り、處もかへず殉死なすは(ト天守の方を見かへりて) 不忠の臣が無上の面目。……只恨むらくは病の爲に、千金の寸陰後れしため……

(ト遺恨の思入にて、じつと本丸の方を打見やり苦悶して倒るゝトタンに、天守の火の手はますゝ熾になる。此時、揚幕より大御所家康、馬上にて旗下大勢を引したがへ、高力左近馬脇につきそひ、門前に近づく。始終、本丸の火の手にのみ目を注ぎたりし大御

所、此時ふと市ノ正等を見て馬をとめ、侍臣を顧みて何事か命ずる。侍臣走り進みて、様子を見届け、又走せ歸りて、馬前にひざまづき

侍

片桐市ノ正主從にござりまする。

(ト大御所うなづき、高力左近を見かへり、其意を得させ、馬をとめる。片桐出雲守主從は漸く心附き、俯伏しぬたる市ノ正を抱き起さうとする。高力進みちかづき)

高

アイヤ、片桐市ノ正どのお見受け申す。大御所の御説でござる。御

重病の儀なれば、御遠慮には及びませぬ。其のまゝに御座なされよ。

(ト門内より豊島刑部、加賀爪甚十郎、前幕の服装にて井伊の部下に警護せられていで來り、大御所と見て走り進み、恭しく馬前にひざまづく)

大

オ、刑部か、甚十郎。シテ秀頼母子は。只今の砲聲心元ない。如何ぢ

や。秀頼はつれまゐつたか。

豊

ハ、恐れながら、遺憾至極に……

二人

ござりまする。

大

ヤヤ、すりや手後と相なつたか。

二人

御意にござりまする。

豊

御説の通り、我々兩人まかり向ひ、申し入れましてござりまするれど

も……

加

かにかくと事むづかしく、御興の準備なくば、決して此城を出てが

たし、と頑固なる御返答。

加

片桐いまだ參られざるゆゑ、據なく我々兩人、一旦其場を引揚まし

たを……

豊

血氣にはやる壯兵ども、お調停破れたりと存じ誤り、といひる暇もこ

れなきうち……

加 右大臣どの、御座所を目がけ、切つてはなせし大砲小銃。

豊 かなたも豫てお覺悟ありしか、糒庫は忽ち炎上。

加 右大臣どのをはじめとして、一同御生害に……

二人 ござりまする。

(ト、かほる言上する。大御所聞了りて)

大 母子の者を迎へんとて、わざくこれまで出向いたるに……ハテサテ  
残念な事をいたしました。

(ト本丸の方を見やりて、遺憾の思入。)

左近。

高 ハッ。

大 市ノ正が心中察し入るわい。ソレ、投薬の用意。

(ト低聲にて吩咐、やがて左右に指揮して徐かに馬を降り、刑部、甚十郎を随へて市ノ  
正主従がそばに歩み寄る。出雲守、十兵衛、息も絶えなくなる市ノ正を抱き起さうと  
する。大御所科介にて之れを制め、其傍近く床几をすまさせて腰を下し)

市ノ正、々々。

(ト出雲守市ノ正の耳に口を寄せて)

出 父上、々々。大御所の御前でござりまする。

(トこれにて市ノ正少しく頭を擡げる。高力左近薬劑の用意をして持ち來り)

高 お藥劑をたまはりまする。

出 ハ、有難く頂戴つかまつりまする。

(ト出雲守うけいたゞき)

出 父上、大御所よりお薬湯を賜ります。

(下十兵衛は後より市ノ正を扶け起す、出雲守は前より扶けて藥劑を服せしめようとする。市ノ正物に之を掛け、左右より扶けられて危座し、無言にて敬禮する。大御所つくづくと見やりて)

大 市ノ正、嘸殘念なことであらう。察し入る。此期に及びて言ひ慰むる言葉も無い。(下歎息して) かゝる良臣ありながら、かゝる仕儀と相成るは前世の宿業と申すものか、是非もなき豊臣家の薄運。……主人の馬前に立つて命を惜まぬ者は間々ある、勘氣手打を怖れず諫言を申すものも得がたうなけれど、國を去るも名を潔くはせず、大義を存せぬ輩には不忠者、謀反人よと譏られながら、心中一日も主家の安危を忘れず、まつた二つには天下千歳の爲を存じて、止むを得ずば、せめても無要の



軍をといめて、永く主家の祀ほどは、世に絶つまいとの心がけ。……天晴良臣のかいみなるに、如何なれば其の志しを遂げさせぬぞ。まことに千歳の遺憾ぢやわい。……我が家幸ひに此末永く榮えうとも、盛衰は循環、末路あるは覺悟の前ぢや。子孫に語たりつたへて、足下の如き良臣をば……

(トいひかける。市ノ正氣次第に衰へてケタリとなる。大御所床几を離れて、且元のすぐ傍に立ちて見おろしながら)

市ノ正、々々。

(ト小聲にて呼ぶ。孝利、十兵衛、市ノ正を左右より掻きいだきて)

出 父上、々々。

(ト呼ぶ。市ノ正がすかすかに目を開く。出雲守又呼ばうとする。大御所これをとめて)

大 そのまゝく。

(ト小聲にていひつける。市ノ正また目をふさぐ。出雲守、十兵衛、懸念の思入。大御所よろしく哀悼の思入。)

幕

沓手鳥孤城落月畢

附 録

「沓手鳥孤城落月」と史實との關係

(明治三十九年稿)

此作は「桐一葉」の後段なれど、彼の作を綴つた當初には、遇なものを書き足す心ではなかつた。「桐一葉」を綴つた當時の考は、境遇悲劇といふとに、興を覺えたといふよりも、寧ろ深く同感する所があつたからで、其頃批評家たちが頻に主張した美學上の脚本論などには、餘り多く心を注いでゐなかつたのであつた。

片桐且元の悲劇は性格に因縁する所が比較的少なくて、境遇に因縁する所



が比較的ひかくてきに多いといふことが深くふか小生の心こころを牽ひいた。而もそれが希臘劇ギリシヤげきに見える運命うんめいの作用さようなどは頗る趣おもむきを異ことにし、性格せいかくの作用さようと境遇きやうぐうの作用さようとが相纏あひてん綿めんし錯交さくかうし、互たがひに因いんとなり果くわとなつて紛糾ぶんきうの極きよくに達たつし、片桐且元かたぎりかつもとが駿府すんぶより立返たちかへつた當時たうじの大阪城内おほさかかじやうないは、譬たとへば百千束たばの絹絲きぬいとが一度ひとに牽ひれて縛もつれたやうな爲體ていたらく、如何いかな蟻通ありとほしが再び生うまれようと、如何いかなソロモンが再生さいせいしようと殆ど如何いかんともすべからざる有様ありさまであつたのだ。大野修理親子おほのしゆりおやこを打果うちはたしたら善後策ぜんごさくが立つかといふに、さうはゆかぬ。思おもひ切きつて淀君よどぎみを暗殺あんさつしたら何なんとかならうかといふに、さうでもない。早い話はやが近頃ちかごろの東洋とうやう小王国せうわうこくの情態じやうたいに髣髴ほうふつたる到底救たうていすくふべからざる窮境きうきやう、而して此間このかんに介立かいりつして托孤たくこの遺命ゐめいを全まうせんとする且元かつもと其ひとの人は、思慮しりよが餘あまりあつて勇斷ゆうだんが足らず、策士さくしながら、本來ほんらいは正直律儀しやうぢきりぎで人情にんじやうが深く、随したがつて思おもひ切きつた陰

險けんな又は殘忍ざんにんなことは出来ぬ人物じんぶつ、又出来たところて豊臣家とよとみけの爲ために寸功すんこうもなかつたであらうといふ點てんが、小生わたくしの甚はなはだ趣味深しゆみふかく感かんじたところであつた。よしや且元かつもとに十倍じふばいする器量きりやうの人物じんぶつが之これに處しよしても解決かいけつは出来まい。勝海舟翁かつかいしゆうおうが其その著ちよ「鷄助けいすけ」に記しるされた所ところは強あながち謙遜けんそんの語こととも思おもはれぬ。慶應けいおう戊辰年かへたうしじきの自記しやうちう一章中いちやうちうに曰いふ

慶應けいおう戊辰ぼしんの變へんは余よが終身しゆうしんの愁苦しゆく危險きけん慘憺さんたんの極きよくなり、奉命ほうめいより以來このかた是等これらは胸中きやうちうに謀はかるといへども、身み尪わう弱膽識じやくたんしき不足ふそく、其愁苦そのしゆくに狼狽らうばいす、勉勵べんれいして説諭せつゆ辯解べんかいすれども、衆人しゆうじん余よが心理しんりを察さつせず、疑念ぎねん甚はなはしく、薩長さつちやう二藩にはんの爲ために遊説いうせいするの疑固うたがひかたく、出づれば途上とじやうに規ねらひ討うたむとし、入れば激論げきろん殺害がいせむとす、或あるひは憤激ふんげきして是これを叱しつし、或あるひは論ろんじて是これを退しりぞかしむ、今日の愁苦しゆく孰いづれにか告つげ孰いづれにか訴うたへむ、唯一片たひの精神せいしん不欺あざむかざるの志こころざしを以もつて死しすと

も自から泉下に愧る無きを期する而已

昔大坂の役片桐且元其中間に居て百變千化幼主を補弼す、其苦況凡庸の及ぶ所にあらず、然れども時の諸臣其忠諫に従はず、千慮萬苦終に水泡となり、隨て豊臣氏の社稷滅す、余今日の事に處して其愁苦を察す、省るるに古人に及ばざる事萬々、如何ぞ我が徳川氏をして全きを得せしめむ、是を知つて退かざるは頗る愚也といへ共、思ふに我が徳川歴代渥恩の名族、近日の大變に逢うて其方向を失し、一人も大義に苦慮盡力し、死してやまむとする者なきは、獨り是余等の耻にあらず、我が家君の耻辱、後世之を如何といはむ、譬へば一身八裂溝壑に擲たるゝもまた顧みるに暇無きものあり、亦悲しからずや(三年三月十九日曉記)

翁の境遇と且元の境遇とを比較するに、よしや苦境たることは同等とした

ところで、後者の方が幾割か割がわるいと思はれる。將軍家と皇室、豊臣氏と徳川氏、敵身方の關係が大分異つてゐる所に心を注いだなら、此理はおのづから明かであらうと思ふ。それは兎もあれ、作者は一に主人公の此悲惨なる境遇に歴史的、倫理的及び劇詩的の感興を覺えたが原で筆をとつたのであつた。故に、兎も角も一通り此の趣意を描き得たと信じた以上は、もはや其上に美學上の約束などを履行する必要はなかつた。寧ろ作者の意は西洋の劇詩學などに違背するのを承知の上で、態と在來の國劇式を踏襲したのであつた。以爲らく、人を主とせずして事を主となし、幕毎に主人公を異にする程までに局面を雑多にし、波瀾又波瀾、挿話又挿話、而して其大團圓に至つて翕然として收る國劇式は、純然たる性格劇には妙ならざること勿論なれど、我が所謂境遇悲劇の様式としては頗る適當なもので

はないか、と思ひつゝの所爲であつたのだ。換言すれば、或一人二人の罪過の結果で悲劇が起るのではなく、若し人に罪ありとすれば、あらゆる關係者悉くに罪があり、若しまた無しとすれば、誰れにも大した罪過はなく、罪はむしろ境遇にあるともいへる。隠妙にして不可思議な點、それが如何にも趣味深く感ぜられたのであつた。が、何分筆力が伴はぬのと脚色にも無理があつたので、又今になつて思ふと、本來の考其物にも多少の思ひ違へがあつたので、作者の旨とする所が讀者には通ぜず、とりわけドラマツルギに悖戻した諸點が時の諸批評家の非難の的となつた氣味であつた。或は且元の如きは頭から悲劇の主人公となすべからざるものと論じ、或は且元を自殺せしめないのは面白くない、歴史の事實に拘泥して劇詩の本領を閑却したのであらう。抔といふ批評もあつた。要するに「桐一葉」の

且元は意氣地なし又は不得要領の凡骨と解せられてしまつた。若し「桐一葉」の且元に靈があるものならば、嘸かし作者の不料簡を怨めしく思ふことであらうと思ひつゝ、つい後段を書きつがうといふ氣になつたので、初手からの腹案ではなかつたのだ。けれども性格は前後矛盾することのないやうに寫した積りである。又境遇悲劇としての本來の作意には、依然として何等の變化も生ぜなんだ積りである。故に主人公は、見やうによつては此作にも「桐一葉」にも、終始相ならんで二人あるともいへる。即ち一人は淀君で、一人は且元である。強ひて性格劇と見ようとすれば、此二人者の悲劇即ち双頭の性格劇とも見られるのである。

さて参考書は「桐一葉」の時と略々同様だが、考證が主ではなく、興を幫けるのと材料を求めるのが主であつたから、正史と俗書との區別なく、例

へば「難波戦記」、「大阪軍記」流のもの、「慶元記」、「明良洪範」のやうなもの、又は「豊内記」、「片桐家秘記」のやうなもの、つまり何でもかまはず、役に立ちさうなのは、その全部又は入用の箇所々々を走り讀に讀んだ。其うち最も多く役に立つたのは小宮山南梁氏の「徳川太平記」であつた。尤も其記事は大部分他で調べたと、重複したのであつたが、其並べ方がよく、且つ史事實としても略々信ずるに足るものと思はれるから、空想と傳説との關係を示すために、「徳川太平記」の本文を左に掲げておく。

秀頼は淀殿と共に天守に登りて已に自殺せんとしけるに、速水守久急に押留め、勝敗は兵家の常なれば、今暫く待せ給へとて、月見櫓より蘆田曲輪のしかみ櫓へ移らせけるが、大野治長やがて又これを山里の土庫へ移せり、是その急難を救はんが爲なり、速水守久、毛利勝永始終これに

從へり、時に城中火勢益々猛くして殿宇樓閣悉く焦土となりければ、數萬の兵士或は戦死し、或は自殺し、又は逃走り、又は火に焚け水に溺れて死し、東軍に討取る所の首凡そ一萬四千五百三十餘級なり。

此夜家康公は茶臼山に屯せられ、秀忠公は岡山に屯せられしに、城中にては刑部卿局秀頼の御臺所徳川氏を扶け、堀内主水これを導きて城の東なる堀の上に置きしかば、坂崎孝親これを見て茶臼山の陣所へ護送せり。

千姫に關する事實は殆どそのまゝに取入れておいた。事實は小説よりも奇なりといふ諺があるが、大阪落城の事蹟の如きは眞にそのまゝの大悲劇詩で、因縁果報の脈絡を辿つて見ると、只の一筋でも廢りはないやうに思はれる。千姫の事は尙後に引かう。

此日家康公は本多忠政を召て、其の弟忠朝が戦死を弔ひ、從兵五人に感書を給はり、又小笠原忠政の陣へ使を遣して、其創を問ひ、父兄の戦死を弔はる、次の日八日秀忠公、秀頼猶存命なる由を聞き、安藤重信を以て其状を視察せられ、本多正純、井伊直孝、阿部正次に命じて土庫を圍み守らしめしに、治長、守久は重信に告げて、諸士は皆自殺すべけれども秀頼母子の命全からんことを望むよしをいひ出ければ、家康公より加賀爪忠澄、豊島刑部を遣されて治長に諭され、秀頼母子は死せざるやうに計らひ、庫中に從へる諸士の姓名を記し出すべしとありて、片桐且元に命ぜられ、櫓の上より二位の局を召し、淀殿に聊爾のことなきやうに諭すべしとあり、又直孝を以て秀頼に諭され、戦争已に訖りぬれば、別にいふべきこともなし、太閤以來の舊好忘れがたければ若干の領知を

與へて衣食の料となすべし、城を出て此に來られよとありしにより、守久その命を秀頼母子に傳へ、さて治長、守久の云へるは、母子とも謹みて命を承るべけれども徒歩して出ること叶はざれば輿を以て迎へ給はるべしとて再三往復しける内に、直孝、重信、正次等相謀りて云く、此際に至れるに、秀頼なほ存命ならば必ず後來の患あらん、寧ろ斷決して自殺せしめんには如かじとて、乃ち土庫を警衛する者命にし、銃を發せしめければ、治長、守久談判の破れたることを悟りて、庫の中より火を放ち、秀頼竟に自盡しければ、毛利勝永かたはらより之を介錯せり、時に年二十三なり、淀殿も亦介錯せさせて俱に亡せられぬ、後に庫中の屍を検するに、悉く焚損じて誰の屍とも辨じがたかりけれども、骨喰吉光の刀側に在しを以て、僅かに秀頼の屍を知るとを得たり、時に大野治

長、其子治徳、速水守久、其子出来麿、毛利勝永共、弟勘解由、眞田大介、津川左近、荻野道喜、堀對馬守、伊藤武藏守、成田左吉、森島長以、竹田榮應、加藤彌平太、高橋半三郎、高橋十三郎、土肥勝五郎、寺尾勝右衛門、片岡十右衛門、埴原八藏、埴原三十郎、小室茂兵衛、中島將監、中高半三郎等二十餘人殉死し、大藏卿、右京大夫、宮内卿、和期局、饗庭局、お玉局も亦同じく死せり、京極備前守、今木源右衛門、別所孫右衛門は使者となりて城を出、二位局は召れて本陣に來り、青木一重は京師に拘留せられし故皆死せざることを得たり。

家康公は秀頼未だ出來らざるを以て櫻門に至りて待れたしに、直孝、正純來りて秀頼以下自殺の由を申立ければ、公哀憫の色見えて直に駕を還されたり、此日家康公は二條の城に還られ、次の日(九日)秀忠公は伏見城

に遷られ、徳川義直、徳川頼宣も亦之に従はれたり、秀忠公、阿部正次に天王寺口を守らしめ、青山忠俊に玉造口を守らしめ、水野忠清に青屋口を守らしめ、高木正次に京橋口を守らしめ、右隊下の士を率ゐて警衛すべし旨を命ぜられ、又正次、忠俊及び安藤重信に命じて城中の金銀を監視せしめらる、此日從軍の諸將二條及び伏見に至りて干戈全く戢りて四海寧謐に歸せしことを賀せり。

また秀頼が最期に關しての記事は左の如し。

其後秀頼城を出らるべきに極り、乗物二挺と、のへ越すやうにと申出けるを近藤石見聞て、かゝる匆劇の中に何とて乗物の才覺なるべきや、馬を求めて參らすべしといふを速水聞もあへず、いかに此仕合になり給へばとて忝くも秀頼公、淀殿、面を曝して馬に召さるべきや、蠅武者坏の

知ることにあらずと悪口して門を閉ぢ、内へ入ると等しく念佛稱名の  
聲同音に聞え、外よりは鐵砲を打かければ、秀頼母子惣じて三十餘人、  
八日の未の刻に自害あり、秀頼當年二十三歳、淀殿は三十九歳也、大御  
所後に速水が取計ひを感ぜられ、前年人質として江戸へ取置る、速水が  
子を助命して福島正則方へ出仕せしめ、姓名を三宅庄九郎と改め、七百  
石を給はりしが、福島廢して後は黒田長政方へ仕へたり。

秀頼の切腹せしは干飯櫓のよし、是はゆうせんが櫓とて茨木より移せし  
櫓なり、殉死三十二人の内、高橋半三郎十五歳、土肥庄五郎十七歳、高  
橋十三郎十三歳、三人は秀頼の兒小姓なり、秀頼最後のとき云るやう、  
上臈どもは皆介錯を申付たり、三人の兒小姓と眞田大介とは幼少なり、  
加藤彌平太、武田佐吉介錯して取せよとありければ、三人の兒小姓並に

大介いづれも物の具脱置、四人西向に並び手を合せ念佛高らかに唱へ、  
雪の如くなる肌おしぬぎ、四人一度に聲をかけ、いさぎよく切腹せしを、  
彌平太、佐吉介錯し、各大刀を捨て涙にむせびしとなり、一説に秀頼の  
介錯は氏家、淀殿の介錯は速水、女子幼子の介錯は毛利とあり、又秀頼  
は色白く肥満して長六尺二寸ありしと見えたり

又御臺所(千姫)の事に關しては曰はく

御臺所は秀忠公の姫君にて、名を千姫と申し、七歳のとき大阪城に輿入  
して秀頼の室となり、落城のときまで城中に在して、竟に危急の難を遁  
れ、城外へ出られしとは、舊記の載する所に據るに、云く、佐々孫助  
といふ者逆心して大臺所へ火を放ち、次第に燃立けるゆゑ、秀頼は、初  
め天守へ登りけるが、程なく下りて月見の矢倉より芦田曲輪の矢倉へ移

られたり、其時御臺所をも伴はれしかば、大野修理介抱して傍の女房にいへるやう、もはやかゝる次第になり候へば、御前さまには城外へ出給ひ大御所へ願ひ上られ、内府さま(秀頼)御母子のお命恙なきやうに計ひ給はりたしとありしにより、供奉の女房もみな口々に修理が申せし如くになし進らせられて然るべしといひければ、それより城外へ出られしが、其時大臺所は盛んに焼上りて城兵はうるたへ騒ぎ、拔身の槍太刀携へて走り廻りければ、供奉の女房を始め身を縮めて歩みかね、高石垣の上へ寄集り、御臺所の中に置き、めぐりを取圍みて居けるに、紀州熊野の士に堀内主水といふ者ありしが、新宮左馬助(朝重なり)など、同じく冬陣の頃より城中に在ければ、右石垣の方を見やりしに、二十人ばかりの女房の中に白地に葵の丸のちらしを付たるかつぎを着し女性の見えし

に心づきて、主水走りより、誰殿かと尋ねけるに、是は關東の姫君なれど去りがたきことありて城外へ出給ふにより、供奉いたされ候へといへば、さらばとて主水先に立て人を拂ひつゝ城を出しに、坂崎出羽守(孝親)も來合せて供奉したり  
又「老談一言記」を引きて曰はく  
天壽院殿(御臺所のこと)につかへし松坂は今の越智民部が祖母なり、大阪落城のとき十四歳にてありし、天壽院殿に淀殿ひしとつきそひ給ひて事急ならば刺殺し參らせん様子なりし、矢倉に上りて淀殿御側居よりておはせしに、然るべき御運にや、誰とはなしに秀頼さま御自害にて候と申せしかば、淀殿御自害は時まだはやしとて、ついと起ちて矢倉を下り給ふ間に、女中蒲團を以て天壽院殿を卷きて、矢ざま押開ておとし參らせし



ときに、松坂も石垣をつたうて下りたり、残りの女中も同じく石垣を下りおほせんとせし處に淀殿歸り給ひて、叶はずと見えし、堀内主水御供して岡山へ入まゐらす、松坂は武者の通るをよびかけて其尻馬にのせられて御供したり、多くの死骸の上などをわたりて出たりし、その後大雨のときに簀を着て馬にのりて京へ参りしといふ。

又大住與左衛門に關しては

大住與左衛門は太閤の世に臺所にて魚鳥などを洗ひし下男なりしが、取立られて料理人となり、後は料理人の頭となり、秀頼の時には臺所頭となりて此へもかしこへもまめまめしく立はたらく者なりしが、遂に逆心して己が手下の者に云つけ、大臺所へ火を放ち、事をはりて後右放火のはたらきを申立、旗本へ召出されんことを望みけれども、其の望み未だ

叶はざる内に病死せり、籠城中に、或時渡邊、大野同座の處へ後藤來りて云へるは、おもしろきことを聞くものかな、大住關東へ内通するのことなりと、治長聞きて、いやいや與左衛門に限りて其氣遣ひ曾てあるまじ、渠は魚洗にてありしを太閤取立られ、秀頼公御口に叶へるものを進めさせよとありて秀頼公へ付られしものなれば、籠城後も處々あまたの倉の鑰を與左衛門一人にて預り、晝夜をかぎらず御用を辨ずれば、彼の心入にては中々貳心あるまじきなりといふに、後藤、いや、鈍なる者より其様なるものが却て氣遣はし、と云けるが、果して城外より火矢を射けるときに、内より火をかけたるは大住なりとぞ（一書大住を佐佐孫助に作る）

又且元の最期に關しては

廿八日秀忠公、直孝、高虎に金銀千枚分銅各二個を賜はりて其軍功を賞せらる、此月、中國、西國、南海の諸將兵を率ゐて大阪に至りけるが、中途にて大阪城の陥りしことを聞て、各々其の兵を國に還し、其身のみ京師に來りて大捷を賀せり、此日片桐且元駿府に於て卒す、且元七日の戰に岡山に出しは、蓋し疾を興して出たるなり、是に至りて豊臣家の滅びたるを見て、深く愧ぢ憤り、遂に狂疾を發して卒せしとも云へり。

按ずるに且元が死については諸書に傳ふるところ一様でない。「山本日記」には

片桐市ノ正去年之夏のころより氣色宜しからね共、今度の事なれば兩方心に懸る故片時も休息なく立廻りしが、すてに五月七日に落着し、八日に秀頼公御巢被成と力を落し、よわりて和州知行所まで漸歸り、我領知な

がら法隆寺等其外遠慮にてヌカクアベカクアンシと云所に先居座し、氣色おもりぬれば不自由なる故京へ上り、京我屋敷二條御城際なる故常陸殿へ申し、上三條衣の棚つきぬけ、松田庄右衛門と云所司代屋敷折節明たるを板倉伊賀守に斷申借り居て、五月廿八日秀頼公より廿日後死去す、唯ひとりと近年苦勞し、剩何事も其甲斐もなく水に成たる事共、誠世の理りと云ながら豊臣家、わきて市正、左衛門太夫等ためし少くぞ覺ゆる。と見え、「藩翰譜」にはヤハリ駿府で逝去したやうに書いてある。或は自刃したのであらうともいひ、或は食を斷つて死んだのであらうともいふ。正史上の批判は孰れにあるか知らぬが、演劇の脚色上からいふと、「徳川太平記」と「山本日記」とに記すところが、尤も都合よく思はれたゆゑ、大體に於て之れを取入れ、幾多の想像を加へて現在の作のやうにした。岡山の

陣所を茶臼山とし、廿八日に死んだのを八日の當日櫻門で血を吐くことにしたまで、甚しく作りかへた所もない。但し史乗の上では且元が心中はよくは分らぬ。岡山の陣所へ出頭して何を願つたか明かには分つてをらぬ。就中淀君の座所へ大砲を打かけたといふ事實に關する疑問が未解決の姿のまゝで残つて、忠か不忠かと疑はれてゐるのを、此作と「桐一葉」とで描寫し解釋して見ようといふのが作者の志してあつた。すなはち一面はシルレルがワレンスタインの序詞中に述べたやうな意味もあつて、幾分かの倫理的インテレストもまじり、史論的感興も混じてゐたのであつた。

“In history's page reputation wavers,

As party hate or favour sway the scale;

Yet shall the poet's skill to sight display——

Yea, bring him nearer to your human heart.

For Art, which all embraces, all confines,  
Subdues extremes, and brings them back to nature;  
She looks at man, urged in the whirl of life;  
And, lenient to his errors, she awards  
His evil constellations half their blames.

Trans. by I. Gover.

史論家的感興も混じてゐたといつても、それはあくまでも二の町の沙汰で、決してそれが爲に劇の本領を曲げようとしたのではなかつた。本來小生の史劇に於ける態度は、彼の高尚優雅といふ名稱の下に、繪巻物の活動に外ならぬものや時代風俗の物言ふ活人畫に類するものが歡ばれ、之れを活歴劇ともてはやし、甚しきに至つては蠟を嚙むやうな、活動に乏しい、情熱皆無の、形似一點張の、而も人情からいへば却つて嘘としか思はれぬもの

の一時行はれたのに反動したので、彼れを一種の典雅主義といふべくば、小生のは隠然近松とシエロクスビヤとに胚胎した一種の新ロマンチズムともいふべきものであつた。活歴主義の主張は、毎に風教に裨益すべきやうに物せよ、即ち忠臣、孝子、義僕、英傑、節婦、貞女等を主人公とせよといふが其一つ、成るべく史事實に忠なれ、詞も服装も道具立も成るべく其の時代に忠なれ、といふが其二つ、事件も人物も脚色も餘りに荒唐無稽ならしむる勿れ、扮装、科介も成るべく自然に遠からざれといふが其三つであつた。成るべくといふ語の解釋次第で、これらは必しも異存のあるまじきとなれど、實際の出来榮が甚だ妙でなかつたのみならず、おひおひ考證沙汰と風教論とがむづかしくなつて、肝腎の劇詩の本領が留守になり、道具や衣裳の穿鑿が届く割合には時代精神や不易の人情はあがつたりの撫

附仕事、よく出来たのさへ、兎もすると「平家」や「太平記」を白で聴かされるやうな風のものであつた。で、活歴劇も一時行止りとなつてしまつた。小生はそれが甚だ氣に入らなかつたので、も少し火のある、熱のある、形似の上では不自然でもかまはぬ、情趣の上で自然な、いは、も少し行儀のわるい、活動に富んだ、玄關前ばかりではない、寢間や臺所やを見せた、餘所行仕立てない、不斷着姿のまゝ、成るべくは綻びたまゝ、破れたまゝ、といふやうな史劇がほしいと思つた。近松では餘り荒唐、默阿彌では餘り淺俗、形式の上はエリサベス劇程度で、性格を描寫したり因縁果報の理をほのめかしたりする手心は是非ともシエロクスビヤなどを理想としたものがほしいといふ野心があつて、史材の取捨鹽梅などもほゞ手本と同格にゆかうと思ひたつた。即ち活歴家とは全く別に、成るべく歴史の裏をくくと

規つて、舞臺面も成るべく不行儀な、我れを忘れた、氣違ひめいた、こつた返した、てんやわんやなのを主とし、詞づかひも成るべく情を痛切に表するに足るやうなのを選び、情の激した瞬間には貴賤もなく賢愚もないといふ點に重きを置いて綴つたのが此作と「桐一葉」、「牧の方」である。そのうち此の作は、最後の筆だけに、大ぶ反動當時の熱が下り、多少自分の思はくも變りかけてゐたゆゑ、幾らか甚しいところが減じてゐるが、「牧の方」時代には、まだ自信が強かつたのだけに、一段薬がきゝすぎてゐた。かういふ譯ゆゑ、すべて小生の史劇は相應に歴史を調べて書いたものではないが、強ちそれに拘ふといふことはない。例へば大野道軒の如き、正史には治長の弟に道見又は道犬とあつて、父にはかやうな人物はない。尤も「慶元記」には、「大野道軒、治長の叔父、始の名義濃守盲目なり」とある

が、此書も疑はしいことだらけ。然るを脚色上の都合より態と俗説のままに治長の父として用ひておいたなど、かやうなことは他にもある。又身分、年齢、服装、言語なども第二、第三のこととして等閑に附した故、歴史家や穿鑿家が見られたなら定めし異議があらう。尙淀君の性格に關しては、「太閤記」や「豊臣閨閣傳」など、いふ俗書や小説に負ふ所もあつたが、無論大部分は作者自らの想像で、所謂活歴流の考證や穿鑿に成つたものではなく、又敢てさういふ穿鑿をして見ようとも思はなかつたのである。尤もヒステリーたちの人物に作つて見ようといふ考へは「桐一葉」を著した折に三上博士を訪ひ、話の序に同君が示された曲直瀬玄朔の「醫學天正記」から多少のヒントを得たので、全然たる空想でもなかつたのであつたが、例の粗放から其の折それを寫しとりもせずおいたのを

思ひだし、今度再び同君を煩して淀君に關する限りの寫しを手に入れることを得たから、そのまゝ左に掲げて、まだ見ぬ人々の參考に供する。玄朔は正親町天皇、後陽成天皇をも拜診しまゐらせ、幕府の侍醫となつては將軍秀忠に仕へ、寛永八年に齡八十歳で歿した當代の名國手、其の著いろある中で、件の「天正記」は天正年間の著名な人物の臨床治療の實記であるから、歴史上一種の證文たるの價値があるとのことである。

一、秀頼公御母御年三十餘 御氣鬱滯不食眩暈快氣湯木香飲也（十月二日、慶長？）

一内大臣秀頼公御母三十餘歲 氣鬱胸中痞塞而痛全不能食干時頭痛順氣湯回の痞滿 養胃湯

以上二條の外尙一つ左の如く記したのがあるが、或は前のと重複か、別か、

分らぬと三上君は附記せられた。

一秀頼公母公三十餘 氣鬱心中痞塞疼全不食干時頭痛胃湯木令守貴各一 莎宿

木洞白薙朴各七 甘二 藁姜入十餘貼之後同劑爲丸久服而痊（五月一日）

「孤城落月」の淀君との關係は兎も角もとして、甚だ面白い證文だと思ふ。なほ淀君や且元の性格については「都新聞」に載せておいたから参照せられたい。（明治廿九年四月、東京座にて上演の當時、早稻田文學掲載）

附 録（完）

5662

大正五年十一月十二日印刷  
大正五年十一月十五日發行

(沓手鳥孤城落月)  
(實價金五十五錢)



著者 坪内雄藏

發行者 和利彦

印刷者 高橋郁

印刷所 東京市京橋區月町二十五番地  
三協印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地  
春陽堂

電話本局五一七番  
振替東京一六一七

□ 作表代の家作表代 □

■ 桐	一葉	坪内逍遙氏著	定價六十八錢 送料八錢
■ 牧	乃方	坪内博士著	定價四十六錢 送料六錢
■ 金	毛狐	坪内逍遙氏著	定價八十八錢 送料八錢
■ 瀧	口入道	高山樗牛氏著	價四十五錢 送料六錢
■ 金	色夜叉	尾崎紅葉氏著	價一圓三十錢 送料八錢
■ 由	縁文庫	泉鏡花氏著	送一圓五十錢 送料八錢
■ 浪	六傑作集	村上浪六氏著	各一圓五十錢 送料各十二錢

□ 作表代の家作表代 □

■ 紅	夢集	長田幹彦氏著	定價九十五錢 送料八錢
■ 大	川端	小山内薫氏著	定價七十錢 送料六錢
■ 刺	青	外九篇 谷崎潤一郎氏	定價九十五錢 送料八錢
■ 入	江の邊	正宗白鳥氏著	定價九十五錢 送料八錢
■ 合	歡の花	田山花袋氏著	定價九十五錢 送料八錢
■ 青	春	小栗風葉氏著	送一圓五十錢 送料八錢
■ 土		漱石氏序 長塚節氏著	定價九十錢 送料八錢



名家傑作集

錢六稅郵 □ 錢拾五冊壹

(1) 不言不語	(2) 其面影	(3) 照葉狂言	(4) 水彩畫家	(5) 白露紅露	(6) 野の花
尾崎紅葉著	二葉亭著	泉鏡花著	島崎藤村著	幸田露伴著	田山花袋著
「不言不語」は美しき妻女の悲劇。心の闇は盲人の片戀哀話。	不遇の才人が流涙する経路を描き、現實的傾向の先驅を成す。	可憐の少年と女狂言師との情愛を描ける清純なる浪漫的物語。	最初の試みになれる記念的作品。印象の鮮、情感の新を看よ。	深遠なる宗教的哲學的傾向を高揚す。正に代表的東洋藝術也。	「野の花」は主情的傑作。重右衛門の最後は新藝術の第一聲。

以下續刊……

春陽堂

5662

5  
2